

史上最強の女子高生

光の甘酒

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

何でもできちゃうう史上最強　ハイスペック女子高生　志賀有栖。ゆるーく日常を過ごしつつ遭遇する色々な問題、時には力づくで・時には頭脳でサクッと解決しちゃうぞ！

目 次

第1話	志賀有栖——前編	1
第1話	志賀有栖——後編	11
第2話	フラグ回収士——前編	29
第2話	フラグ回収士——後編	37
第3話	モニカのふたり	45
第4話	市ヶ谷有咲とワタシの関係	54
第5話	ネコなあの子とか?——前編	66
第5話	ネコなあの子とか?——後編	75
第6話	風紀委員のあの子といつものワタシ——前編	83
第6話	風紀委員のあの子といつものワタシ——後編	91
第7話	白鷺千聖の場合	101
第7話	瀬長瑠衣の場合	107
第7話	志賀有栖の場合	114
第7話	また、始まる	124
第8話	こころこねくと	133
第9話	うおおおお!僕アルバイトオオオオ!	139
第10話	ガレット・デ・ロワとセクシーサンタ	149

第1話 志賀有栖——前編——

ああ、何度目だろうかこの感覚

私はゆっくりと目覚める。そして状況を確認する。

目を閉じ、自分の頭に記憶されているだろう事項をインストールする。

そつか、これが今の私。

私はハンガーにかけられている制服に手をかけ、着替えるのであった。

※

私は呪われている。永遠に生き続ける呪いだ。

とはいえ年相応に成長し、老化し、天寿を全うする。

しかしそのあとランダムに割り当てられたパラレルワールドに飛ばされ、そこで新しい私としての人生が始まる。これを無限に繰り返すのだから永遠に生きるという表現は間違いではないだろう。

今までいくつの世界を回つてきただろう。例えば女優をやつていた世界もあつたし、クソみみたいなブラック企業に勤めた世界もあつた。ミュージシャンとして全国を渡り歩いたこともあつた。軍隊にいたこともあつた。

ちなみにひとつ前の世界での私は格闘家で、最強の女格闘家として世界を制したのであるがその後に交通事故にあつてあつさり死んでしまつた。

うわ、車に轢かれたことは記憶にない。つてことは即死だつたのかなー・・・くわばらくわばら

そして今回の世界。今回の世界は・・・

「え、ただの女子高生?」

それだけである。何の変哲もないただの女子高生。

花咲川女子学院に通う3年生。以上。

しかし女子高生をやるのは久々である。目覚めたタイミングでの

年齢はまちまちである。

乳児で目が覚めることもあれば小学生、成人女性の時もある。いきなり軍の作戦中だつたりもした。

ようは目覚めたタイミングでこの世界での私の設定が作成され、それを記憶として頭の中にインストール、世界に反映されるというわけである。

「史上最强の女子高生を目指すつてのも悪くないかな」

なんて冗談めいた独り言をする。

まあ今までの世界の経験値が今の私にすべて反映されているのであながち間違いではないが。とにかく今回の世界では自由にやれという思し召しであろう。

「志賀有栖（しか ありす） この世界でも頑張っていきますかー」

氏名：志賀有栖 性別：女性 年齢：18歳

特技：演技全般 楽器全般 格闘技 対人戦 アクション 銃（拳銃、小銃、狙撃） 剣道 居合道 護身術全般 車の運転 バイクの運転 諜報活動 英語 フランス語 ドイツ語 ブラック労働環境にもくじけない心 etc…

※

「アリスちゃん、おはよう！」

「おはよう、アリスちゃん」

「おはよう、アリス」

「彩ちゃん、かのちゃん、ちーちゃん。ごきげんよう」

通学途中、丸山彩ちゃん、松原花音ちゃん、白鷺千聖ちゃんに出会った。仲のいい学友のようである。

「アリスちゃん、相変わらず挨拶だけはお嬢様みたいだね」

「それはどういう意味かなー？彩ちゃん？」

「わわつごめんごめん」

「あはは。相変わらず仲いいね、彩ちゃんとアリスちゃん」

「えー？ 私はかのちゃんとも、とつても仲良しのつもりなんだけどなー」

「きやつ・・・も、もうアリスちゃん。すぐに抱き着くのやめてっててばあ～」

「かのちゃん・・・相変わらずかわええのう・・・」

「アリス、またおじさんみたいになってるわよ」

「おおつと。こいつは失礼。えつと、ちーちゃんも仲間に入れてあげればいいのかな？」

「なんでそういうなのよ」

あー楽しい。でもこれもあくまで作られたものであつて自分で形成したコミュニティでないのが少し寂しいな。

まあインストールのおかけでどうやって親友になつたかとか幼少期の記憶もあるからまぎれもない私なんだけどさ。

「あ！アリスお姉さま！」

「アリスお姉さま・・・相変わらず美しい・・・」

「アリスお姉さま！おはようございます！」

「ふふ・・・『きげんよう、みなさん』

門に入ると下級生たちが私を見つけ騒ぎ始める。
挨拶に返答しながら歩く私。

ありがたいことにどうやらこの世界の私は大層な人気者らしい。

「相変わらず下級生にすごい人気ね、アリスちゃん」

「みんなかわいいねえ」

「会話が噛み合つてないような・・・」

「かのちゃん、それは気のせいさ」

「はあ・・・なんだか薰を見ているようで頭が痛くなるわ」

「そんなこと言いつつ一緒にいてくれるちーちゃんのこと、私は大好きよ?」

「も、もう!先に教室行くわよ!」

「あはは、ちーちゃんごめんって」

そういつて進んでいるうちに中庭が騒ぎになっていることに気が付いた。

「なんの騒ぎかしら?」

「アリス、あれ・・・!」

ちーちゃんに言われて上を見上げるとそこには屋上の柵を超えて立っている女の子がいた。

「キミ、危険だから!」

先生が下からそして屋上の柵の向こうにもいるようで説得しているようである。

「ど、どうしようアリスちゃん!?!」

「彩ちゃん、落ち着こうか」

「逆になんでそんなに冷静なの!?!」

自ら命を絶とうとしている女子生徒を見上げ私は考える。

飛び降りる高さ、落下速度、下で受け止めたとして私にかかる負荷

は・・・

「いけそうね」

「え?」

彩ちゃんがそういつた瞬間、その女生徒は——
飛び降りた。

「きやああああああああああああああああ」

あたりに悲鳴が木靈する。

「アリス!?」

そして駆け出す私。

「はつ！」

そして見事に落ちてきた女生徒をキヤツチし衝撃を受け止めるため受け身をとつた。

「上手くいった！。ケガもしてないみたいね」

どうして駄目なんですか！私は……私は……

「うう・・・これで苦しみから解放されると・・・あい

れると思つたのに・・・！」

気が緩んだのか気絶してしまったその子。

その後救急車が到着し、その子は運ばれていつたのであつた。

1

「アリス!! 何を考えているの!?」

「まあでもあのままだつたらあの場にいたみんなトラウマ確定よ?」

「だからってあなたが巻き込まれたら……！」

「実際巻き込まれなかつたからいいじやないのよ。でもゴメン、普通は心配になるよね……ごめんねちーちゃん」

涙目で怒るちーちゃんをなだめる。確かに逆の立場であんなものみたら心配するし怒りたくもなるよね。私は私のことをわかつているけど他の人が見たら普通の女子高生だもんね。

「でもさつきのアリスちゃん動きすごかつたね」

「うん、突然駆けだして綺麗に受け止めるだもん。一瞬何が起きてるかわからなかつたよ」

「人生経験の賜物だよ。あ、そういうえば今日警察の事情聴取に呼ばれてるから一緒に帰れないや。このあとも職員室に生徒会……呼び出しがいっぱいなんだよなあ……」

「た、大変だね……」

※

さて、放課後。まずは職員室である。職員室に行くと担任と教頭、学年主任が待ち受けており色々とお説教を貰つた。結果的に人命救助に繋がつたのでおどがめなしではあるが無茶はするなどということであつた。

でもそのあと件の飛び降りた女生徒のご両親が来てめちやくちや御礼を言われた。その時に入院先の病院も教えてもらい後で見舞いにいくことにした。

「失礼しまーす」

「アリスさん。すみませんご足労いただいて」

生徒会室のドアを開けると生徒会長・白金燐子ちゃんと風紀委員長・氷川紗夜さんが待つていた。

「いいよいいよ。紗夜ちゃんとりんりんちゃんの頼みならいくらでも。あれ?今日は有咲ちゃんはないのかな?」

「市ヶ谷さんは別件で動いてもらっています」

「えー有咲ちゃんいないのかー。有咲ちゃんのおっぱいに顔を埋めたかつたのになー。りんりんちゃん、代わりにいい?」

「ええ?／＼／＼

「アリスさん、貴女そのうち捕まりますよ」

「冗談冗談。それで、今朝の件だよね?」

「はい。実は今日飛び降りた子、どうもいじめを受けていたようで・・・」

りんりんちゃんが説明を始める。

「いじめ?」

「白金さん、ここからは私が。実は彼女の友人と思しき方から匿名で相談を受けていたのです。何かを理由に脅しにあつて色々理不尽な目に遭つっていたと。それで生徒会でも調査することになったのですが・・・」

「その矢先に今朝の騒動つてわけね。でもいじめがあつたつてのは合つてるかも」

「何か心当たりがあるのですか?」

「うん。実は今日彼女をキヤッチした時にね。言つたのよ、やつとあいつらから逃げられると思つたのにつて」

「なるほど・・・しかしそうなると誰が、という話になりますが・・・」「調べてみるしかないねえ。んじゃそれが今回の生徒会の依頼つてことでいいかな?」

「はい、よろしくお願ひします」

「いつもすみません、アリスさん」

「いえいえー」

どうやらこの世界の私はこうやつて色々な人の依頼を受けて動くことをやつて いるらしい。

そして今回の依頼は生徒会より、いじめ犯の特定。

よつしや、手始めに被害者の子のお見舞いがてら情報収集かな。その前に警察に行かなきゃだからそのあとか。

「きやー！ アリスお姉さまよ！」

「今朝の活躍みました！ カッコよかつたです!!」

「アリスお姉さま！ 私のお姉さまになつて!!」

「あ、抜け駆けずるい！」

「こらこら、授業中止になつたんだから早く帰らなきゃダメだぞ」

外に出たらなんだかすごい騒ぎになつて いる。私は捕まらないよう に そ う 言 い 放 ち、そそくさとその場を後にしたのであつた。

※

「腹が減つては戦はできぬというしね」

「あ！ アリスさん!! いらつしやいませ!!」

「きやーちゃん、ごきげんよう」

警察署に行くまで少し時間が あつたので私はおやつがてらやまぶきベーカリーによる。

「きやーちゃんは今日も可愛いねえ」

「もう、アリスさんそれみんなに言つてません？」

「みんなにも言つているけど可愛いに込められている感情はひとりひとり違うからきやーちゃんへの可愛いはオンリーワンだよ？ だから安心してくれて大丈夫！」

「相変わらずですねえ。それで今日は何にしますか？」

「いつもどおり今日のおすすめを2～3個包んでくれるかな？」

「かしこまりました!」

パンを包むさーちゃんを待つている間、私は軽く情報収集することにした。

なんせ今日飛び降りた子はさーちゃんの学年の子だからだ。

「ねえさーちゃん。少し聞いてもいいかな?」

「何でしよう?」「今日の事件知ってるよね」

「・・・ええ。あの子はあまり知ってる子じやなかつたけどああいうことが起るとやっぱショックですよね」

「何か知らない?」

「・・・実はあの子が飛び降りる前、あの子と違うクラスの子がもめているっぽいのを見たんです」

いきなり核心的な情報きちゃつたよ。

「それ、誰かわかる?」

「隣のクラスのー」

私はさーちゃんが知っていることをすべて聞き出し、パンを受け取った。

「私が何かしていれば変わっていたんでしょうか?」

「ううん。気付きようがないしさーちゃんは何も悪くないよ。後のこととは私に任せてね」

「アリスさん・・・」

「もう、そんな顔しないの。またパン買いに来るからさ。その時また笑顔でいらっしゃいませつて言つてよね?」

「・・・わかりました!ありがとうございます、話を聞いてくれて。朝からずつとモヤモヤしてたので助かりました!!」

「うんうん。やっぱりさーちゃんは可愛いねえ」

「からかうのやめてください!!」

「あはは。じゃあ私はこれでいくね。ばいばい」

「ありがとうございましたー！」

さておいしいパンも手に入った栄養補給もバツチリなところで動きますか。

第1話 志賀有栖——後編——

「ねえ貴女達、少しよろしいかしら？」

「アリスお姉さま・・・・？」

私が声をかけたのは2人組の生徒。そう、さーやちちゃんが飛び降りた子とモメているのを目撃した二人だ。

「少しお話したくて。よろしければ一緒にお茶でもいかがかしら？」

びっくりしていたが結局二人はホイホイついてきた。うーん、これらの話次第ではその顔が苦悶の表情に変わるのが心苦しいなあ。

私たちはコーヒーチェーン店に入り、注文を済ませ着席した。

本当はつぐちゃん（羽沢つぐみちゃん）のお店に行きたかったけど話次第ではアレなので諦めた。

「ふう。チエーン店の味も捨てたものではないですね」

「私もそう思います！それでアリスお姉さま」

「話というのは？」

「うーん、貴女達。今朝の事件知っていますね？」

「・・・!?

「も、もちろん知つてます。あんな騒ぎになつたし・・・・」

うん、明らかに動搖しているね。今までの人生、情報を扱う一通りの組織に属した経験もあるので素人相手なら大抵表情が読めるのだ。

「单刀直入に聞くわ。あの子が飛び降りる前、貴女達何かトラブルがあつたのよね？私、みちやつたの」

「上級生のお姉さまが見られるはずが・・・・あ!?」

「素直な子は好きよ」

誘導尋問に引っかかり、ボロつと漏れたようである。

「そ、それは……」

「いじめ、あつたのよね？貴女達が実行犯？」

「ち、違います！」

「でも、いくらアリスお姉さま相手でも言えません……！」

二人はうつむいて震えている。

うーん、これはそう簡単な話じゃない気がしたなあ

「……信じて」

「え……？」

「私を信じてみて？悪いようにはしない。もし困っているなら私が助ける」

「お、お姉さま……」

二人は黙る。沈黙が続くが私はその間一言も喋らずコーヒーを飲みながら待つた。

「……本当に、誰にも言いませんか？」

「うん」

「実は……」

要約するところだ。飛び降りた子含めこの子たち3人は仲のいい親友同士。

しかしある日、出来心でスリルを求めて3人はコンビニで万引きをしてしまった。

それをまた別の生徒に見られてしまい、さらに動画撮影までされてしまつたようだ。

その日からこの3人はその生徒に脅迫され、3人同士でいじめあうこと命令されたり、その生徒におもちゃにされてしまうようになってしまったということだ。

そのいじめをさせられている現場を目撃した誰かが匿名で生徒会に相談したという流れだろう。

しかしそれも遅く、結果もう耐えられないといつて一人が飛びだし、あの事件に発展したようである。

「話してくれてありがとうね。辛かつたよね」

「うう・・・」

「貴女達がやつてしまつたことはよくない。でもそれを理由に理不尽な目に遭つていいくわけがないわ。その生徒の名前、教えてくれるかな？」

「それは・・・」

※

私は戻つてきた。どこにつて？戻つてきたということはさつきいたところである。

「あれ？アリスさん？どうしたんですか？」

「や、さーやちゃん」

そこはやまぶきベーカリーであつた。

「さーやちゃん、そういうことだつたんだね」

「な、なんのことでしょう」

「なんでまたこんな回りくどいことを？最初から私に相談してくれればよかつたのに」

つまりところ、さーやちゃんもいじめ実行犯に脅されていたというわけである。

経緯は3人組がモメているを目撃した後に起きた事件。さーやちゃんはモメていたのが何か関係があるのかも？と思いつの二人に

話を聞きに行つた。

しかしそこには例のいじめ実行犯もいたようみたいだ。

“このこと誰かにいつたら、半グレの彼氏にお願いしてアンタのバ
ンド、一人ずつ潰すから”

「誰にも言えない・・・でも一人で抱えるには怖くて・・・もしみんな
に危害が及んだらと思うと怖くて・・・実は生徒会に匿名で相談はし
たんですけどそれだけだと不安で」

やはり、生徒会への匿名相談はさーやちやんだったのか。

「そこでお店に来たのがアリスさんだつたんです。でもすぐには言え
なかつた。アリスさんまで巻き込むなんて・・・でも耐えられないの
もまた事実で。それならヒントになることをいつて気づいてくれた
ら助けを求めようつて。そんなこと考えてしまつたんです」

「優しすぎるよさーやちやん・・・そんなん、無条件で助けるに決まつ
てるじゃない。私が気づかなかつたらどうするつもりだつたの？」

「その時は諦めようかなつて・・・
「でも現に気が付いた。つてことは私が助けに入つてもいいつてこと
よね？」

「アリスさん・・・」

「やるべきことはわかつたわ。ようは諸悪の根源を断てばいいのよ。
あとのことは私に任せて」

「はい。試すようなことをしてすみませんでした・・・！」

「いいの。終わつたらまたおいしいパンを『馳走してね』

※

「紗夜ちゃん！りんりんちゃん！わかつたよ！」

「アリスさん、本当ですか!?」

「つてお—————！有咲ちや————ん！」

「げえ、アリスさん!?」

「げえ関羽みたいに言うなあ！でもそういうところも可愛いぞ！」

!

胸に顔埋めないでくださいいいい

ヨリイチカヨリイチナシ

「名前しか共通点ないんですけどお?」

「アリスさん!!! いい加減になさい!!!」

「ぬぐお！」

分厚い辞書の背表紙で脳天兜割を食らつてしまつた。

「紗夜ちゃん！これ以上バカになつたらどうするのさ!?」「まったく貴女は！こういうときでもいつもふざけてばかりで……大体この前も……」

「あーはいはいごめんちやいごめんちやい。反省してまーす」

「優秀だなんて／＼褒められて嬉しいわ／＼」
全然反省していないでしょ！またたくそいじどころかなければ
本本当に優秀な人なのに……なんで貴女と言う人は……」

「褒めてません!!」

「あ、あのゝそろそろ話を・・・」

「ああ、りんりんちゃん！放置プレイしてごめんよ！そして有咲ちゃん、素晴らしいおっぱいを今日もありがとう！」

さて、気を取り直して。

「コホン。今回の事件の真相がわかつたよ。まず飛び降りた子と他に一人の子がいて……」

私は知った内容をすべて話す。もちろん、さーやちやんが巻き込まれている件も併せてだ。

「どうわけ

「沙綾……相談しろつての……」

「でも有咲ちゃんの立場でも相談できないでしょ？ 大丈夫、今のところさーやちやんに実害は出でないみたいだしね」

「不幸中の幸いですね」

「それでどうするのですか……？ 氷川さんや市ヶ谷さんにお願いしてた件も芳しくないみたいですし……」

「と、いいますと？ 教えて有咲ちゃん」

「あー……私たちもいじめの存在を受けて先生とかに相談しに行つたんですよ。そしたらわが校にいじめはない、それは勘違いだで一蹴されちゃって」

「腐ってるねえ」

「全くその通りですよ！ 学校側は体裁を守ることしか考えていません！」

「確かにねえ。万引きをネタに脅されていじめが発生したなんて学校側からしたらものすごい不祥事だもんね」

結局学校側はのらりくらりといじめはなかつたで貫き通すつもりだろう。

私は花咲川が好きだ。たとえそれが今回のために構築された設定だとしても紛れもない私の感情だ。

そんな好きな空間が理不尽に汚されるのは我慢ならない。

それにたとえ最終的に隠ぺいされたとしても、少なくとも実行犯が花咲川で二度といじめ起こさぬよう、徹底的に叩く必要がある。

「実行犯を潰すしか」

「潰すとは物騒な……しかしどうやつて？」

「そうだねえ。とりあえずあの子に話を聞きに行くよ」

あの子。そう、飛び降りたあの子である。

お見舞いに来てくださいとご両親に病院も教えてもらっているわけだし彼女に話を聞いて今まで集めた情報の裏付けをするのが一番早い。

「というわけで行つてきます。なんかあつたら勝手に動くね」

※

“わかってるわよね？私たちのことバラしたらあいつらだけじゃなくてあなたの親や友達のこともめちゃくちゃにしてやるから”

病室のドアに手をかけようとした瞬間、聞こえてくる言葉。そして次の瞬間、ドアが開き一人の女子生徒が出てきた。

「あ、すみません」

その生徒は笑顔で謝つてきた。

「あれ？志賀有栖先輩ですか？」

「ええ。あの子のお見舞いに」

「なるほど！あの子は私の親友なんです。飛び降りたって聞いたときはびっくりしたけど……」

「そうなの。彼女は元気だつたかしら？」

「はい！あ、私そろそろ行かなきやなんで有栖先輩、また！」

そういうつてその女子生徒は去つてゆく。
うーん、反吐が出るね☆

「ここにちは

「え・・・？どうして・・・？」

「貴女のご両親にね。体の具合はいかがかしら？」

「先輩に助けてもらつておかげで軽傷です」

「そつか。私が何でここに来たかわかるよね？」

「・・・もう放つておいてくださいよ」

「それはいかない。ごめんだけど貴女がどういう目に遭つているのかを知つてしまつたのよ。知つてしまつた以上、放つておくつてもの性に合わないし。何より貴女たち以外の大事な後輩ちゃんが巻き込まれていてるんだ」

「・・・・・」

「・・・私を信じて。あの子なんですよ？さつき出ていった」

「・・・信じても・・・いいんですか？」

「うん」

次の瞬間、彼女は堰を切つたように涙を流しながら受けた仕打ちを話し出した。

それはいじめの他にとても口にするのも憚られるようなことまであり、聞いているこつちの気分が悪くなるほどであった。この内容はいじめという言葉では生ぬるい、もはや犯罪である。

「そつか。辛かつたよね。気づいてあげられなくて」「ごめんね」

「先輩は・・・悪くない・・・です」

「そう言つてもらえると嬉しいな。でも大丈夫。もうすぐその苦しみも終わるから」

「え・・・？それつてどういうことですか・・・？」

「・・・これから何が起きても貴女は何も知らないし、私のことも知らない。誰がどうなつてもあなたには関わりない。できるかな？」

「・・・・この苦しみが終わるなら。私何でもします!!だから私と・・・私の友達を助けてください!!」

「うん、りよーかい」

※

「こんなところに呼び出してなんのつもりですか？先輩」

「しらばっくれちやつて、呼出状に要件を書いたでしよう？」

「このお前の犯した罪、すべて把握している。ついてはそのことについて話がしたい・・・つてやつですかあ？匿名でこんな送られてきても心当たりないんですけどお？」

「現に来てるじゃない」

「それは・・・」

「御託はいいわ。本題に入りましょう」

私は集めた情報をそのままぶつけた。もちろん、情報源は隠匿してだ。

「ええ、全然知らないですよお、誰から聞いたんですか？」

「言うわけないじやない。言つたら貴女、徹底的にその子を潰しにかかるでしよう？」

「まあ、何となく察しはついてますけどお」

その言葉と共に奥からもう一人、いや二人が姿を現す。

「さーちゃん!?」

「ごめんなさい、アリスさん・・・」

それは、男に捕まるさーちゃんであつた。

「こんなことあろうかと彼氏にお願いして連れてきてもらつたんだ。じゃあ有栖先輩、服脱いでもらつていいですか？あの志賀有栖が被写体なんて、いい映像がとれるとと思うんですよ」

スマホをこちらに向けながらゲス顔で言われてもなあ・・・

「アリスさん！私に構わず逃げてください！」

「あ～うるさいわね。ちょっと黙つてよ！今いいところなんだから！」

「オラ、黙れ!!」

「きやあ!?」

強く腕を締め上げられるさーやちやん。

私はその光景を見て考える。

殺つちやお☆

「こいつもなかなかわいいじゃないか。二人いつぺんに撮影会するつてのも悪くねーんじやないか？」

「うふふ、確かに。有栖先輩、さあ早く・・・ってあれ？どこいったの？」

「いででででででで!?」

そう考えた後、私はすぐさま行動にてた。とはいえた本当に殺○するわけではない。

俊足。一瞬で間合いを詰めてさーやちやんを救出、男の腕を締め上げたのだ。

「は、放せ！俺が誰だかわかってるのか!?」

「私にとつて貴方が何者であるかなんて関係ないし、興味もないわ。ただただ目障りなだけよ。さーやちやん！」

「は、はい!?」

「耳を塞いで背を向けなさい。そしてすぐにここから逃げなさい」「でも!!」

「二度は言わないわ」

「アリスさん!!」

「行け!!!」

そういうつてセーラちゃんを見送る。

「さてと」

「いてえつつってんだろ！放せゴラア!!」

「調子に乗るなよ小僧！」

ボキボキボキッ！

「うぎやああああああ

「あら、腕が折れたくらいで情けない」

「やめ、やめてくれ!!」

「貴様はやめてくれと懇願されてやめるような奴なのかな？己にでき
ないことを他人に要求するなんて自分勝手の極じやないの？」

あれま、軍人時代や格闘家時代に培った力をいかんなく發揮したら
こんなことになってしまった。うーん、手加減つて大事ね。

「こいうのなんて言うんだつけ……？ブーメラン、自業自得、因果
応報……あ！目には目を歯には歯をだ!!よかつたー、思い出せて」

メキメキメキッ！

「いでてえよおおおお……やめくれええええ……」

「あら芸術的」

男の腕がすんごい方向に曲がったのを見て私はそんなことを口に
する。

「あなた、半グレなんだってね？ってことはあの子に手を出した以外にもいろんな人を傷つけてると思うけど・・・自分がやられたからって情けない声出して恥ずかしくないのかな？」

「ううう・・・」

「もう寝ちゃったの？だらしないわね」

痛みで意識を失つた男を床に放り投げ、私は振り返る。

「さてと」

「きやあああああ！」

「やだ、そんな化け物見るような顔しないでよ。傷つくわねえ」「たす、たす、たすけて・・・！」

彼女は腰が抜け、へたりこんだその周りには黄金色の水たまりができていた。

「変態さんだったら需要があるのかも知れないけど・・・あいにく私にそんな性癖はないのよねえ」

「ひい・・・ひい・・・」

「色々聞きたいことはあるから質問に答えてくれるかな？」

「今まで撮つたあの子たちの動画、どこにあるのかな？」

「こ、ここには・・・ない・・・」

私は無言で近くにあつたコンクリート片をつかむ。
そしてそのまま握力のみで粉碎した。

「ひい！」

「もう一回だけ聞くね。動画のデータは？」

「わ、私のスマホと彼のスマホの中です・・・」

「最初から正直に答えなきやダメじやないの。スマホ、出しなさい」

ガタガタ震えながら差し出されたスマホを、私はそのまま握力でひねりつぶした。

粉々になつたスマホの破片を床に放り投げると、次は気絶している男のスマホを懐から出して同じく粉碎した。

「他にはないわよねえ？」

「ないです！ 本當です！」

ふむ。嘘をついている様子はない。

戦意喪失させたし大丈夫そうだ。

「さてと。もう用事はすんだわ」

「じゃ、じゃあ見逃してもらえるんですか？」

「そうね、私は見逃してあげる」

「私は……え？ うつ！」

そしてすぐさま意識を刈り取る。

これで準備は完了。二人を締め上げ、柱に固定した。

「さて、帰ろうかな」

※

「もう、駄目じやない。ちゃんと逃げなきや」

「ごめんなさい、途中で腰が抜けちゃつて」

帰る途中、さーやちやんに出会つてしまつた。

どうやら緊張が解けて腰が抜けてしまつて途中で歩けなくなつてしまつたようだ。

「さーやちやん。ケガしたり変なこととかされてない？」

「大丈夫です」

よく見るとカタカタと震えが止まらない様子である。

あんな目に遭つてしまつたのだから仕方のないことだろう。さーちゃんは正真正銘ただの女子高生なんだし、見かけだけただの女子高生である私とはわけが違う。

「ねえさーちゃん」

「はい? わわつ」

返事を聞かずにお姫様抱っこをする私。

「アリスさん!?

「いいから」

「恥ずかしいです・・・」

「うふふふ、こういう機会でもないとお姫様抱っこなんてできないでしょ」

「もうー! アリスさんつたら!!」

私はさーちゃんをぎゅっと抱きしめ囁くように続ける。

「起きてしまつたことを忘れることは難しいと思う。でもねさーちゃん。もしさーちゃんがまた困つてどうしようもなくつてたまらない時は私が絶対に助けるからね」

「アリスさん・・・」

「怖い思いさせてごめんね。本当にごめんね」

その言葉と同時に緊張の糸が完全に切れたのかそのまま泣き出してしまつた。さーちゃんを抱擁し、私は落ち着くまで待つた。

「もう大丈夫です。ごめんなさい、アリスさん」

「いいよいよ。泣く美少女を抱擁するなんて役得役得」

「アリスさんはやつぱり私が大好きなアリスさんなんですね」

「あら嬉しい。大体な告白ね」

「あ・・・その、それは言葉の綾で」

「わかつてるわ。さて、帰りましょーか」

その後、さーやちゃんに口止めし、家まで送つて生徒会には“完了した”という、メッセージ一文だけ入れて帰宅したのであつた。

※

「詳しく説明してください」

「オッケー紗夜ちゃん。でもその前に有咲ちゃんモフモフしちゃだめ？」

「ダメです!!」

「勘弁してください!!」

翌日、生徒会。

私は昨日送つた完了報告について聞かれていた。

「完了したというのは？」

「文字通りよ。もういじめが起きることはないようにしただけ」「どんな方法をとつたのですか？」

「企業ヒミツ♡」

「・・・実行犯の生徒が登校していないようですか」

「さあ・・・転校でもしちゃつたんじやない?」

「答えになつていません!」

「そんな声を荒げないでよ。私の依頼は結果を出してるじゃない?それ以上聞くのは・・・ルール違反だよ」

これは警告の意味も込めている。威圧する雰囲気を出し、紗夜ちゃんを見る。

「…………！わかりました。これ以上は聞きますん」「うん、よろしい！」

ちゃんと伝わったようだ。私は一転してにこやかな雰囲気に戻す。

「んじゃ、私たち一ちゃん達と約束があるから。紗夜ちゃん、りんりんちゃん、有咲ちゃん、ばいばい」

※

私のとつた手法はシンプル。あの半グレ彼氏とやらの動向を調べ上げたところ、どうやらこの辺りでシノギをしているヤのつく方々のシマを荒らしていることが分かつた。半グレは得体が知れないため、ヤのつく方々もなかなか捕まえることが出来ずに四苦八苦していたらしい。

そこで私はヤのつく方々に連絡をしたのだ。

“貴方方のシマを荒らしている奴らの一人をボコつて縛り上げておくので回収に来てくれませんか？私？私はそいつに個人的な恨みを持つ者です”

これで後片付けまで自動で終わる、まさにエコ！

女生徒の方は半グレの活動自体とは関係ないから地元から追放するだけで済むように話はしてある。

え？仕返しとはいえ犯罪だって？んなもんわかっているよ。数々の世界を渡り歩いた私は司法の脆さを知っているし、犯罪者が理屈の通じるやつらばかりじゃないことも知っている。法律の穴を利用して悪事を働く奴らもたくさん知っている。であれば確実なのは私が知りうる方法で完膚なきまでに叩き潰す。これが志賀有栖流だ。もちろん、必要とあらば司法や警察を使うこともあるけどね。

というのうのが今回の顛末。さて、そんなことは置いておいて早く

いかなきや・・・・あ

私はあることを思い出して生徒会室に戻つたのであつた』

1

「本当に得体のしれない人です」

よかつたんですね？

「あの日は、これ以上追求してはいけない目でした。相撲がね
はありませんが・・・本能的にそう感じてしまつたのです」

「先輩がそういうなら私はいいんですけど、

「燐子先輩？」

—アリスさん、—一体何者なんでしょうか?—

ドアを開けようとしたら重い空気が漂う生徒会室。うん、このタイミングかな。

ガラツ！

かわいいのう、かわいいのう」

「やつぱりアリスさんでした」

「しみじみしてないで助けてください！」

さて、この世界最初の出来事はこれで終わりだ。

願わくば、平和で普遍的で女の子に囮まれた一生を終えられますよ
うに。

え？ もう手遅れ？ しらんがな。

おはよう、
私が愛す世界よ。

第2話 フラグ回収士——前編——

「何もない休日！これこそ休日。」

なんて意味不明なことを考えながら散歩する日曜日。

特に用事もなく気ままに歩く。キッチンカーを見つければ気ままに注文し、花咲川のいろんな風景を堪能するのも悪くない。

「おやおや？」

歩いているうちに大きな公園についたのだがなんだかにぎわっている。

どうやらフリーマーケットを開催しているようだ。

「いいねいいね～こういうの」

私はフラフラつられて公園内に足を踏み入れる。

中古品を売る店もあればハンドメイドの商品を売る店もある。何があるかわからない。これがフリーマーケットの醍醐味だろう。

「あれ？アリスちゃん？」

「かのちゃんと・・・美咲ちゃん？」

歩いていると聞きなれた声に呼び止められてその方向に目を向ける。

そこには慣れ親しんだ親友と後輩の姿があつた。

「かのちゃんも出品してるんだ」

「うん！実は前にはハロハピのみんなと参加してからちょくちょくやつてるんだ」

「私はそのお手伝いってところです。花音さん、一人だと会場で迷う

「ので」

「み、美咲ちやん」

「あはは、かのちゃんがあたふたする姿が容易に想像できるよ」

モニアリノセニヤムテ

かのちゃんも遅くなつたねえ。

まあ遅しくない頃のかのちやんは記憶の中だけだけとさ

「これはクラゲのあみぐるみ?」

うん！大好きな海月をあみぐるみにしたくて美咲ちゃんに教えて

「じゃあハンドメイド?

「褒めすぎだよ～」

いや、眞面目な感じしても花束さんのこれ、アーティストだといふと見

30

かのちやん手先器用だし美咲ちやんが教えたんならこのクオリティは納得だねえ

「……まあ私ち一〇隻の船うかが。」
「…………

「300円だよ」

—300円!? そんな感じで利益出ないでしょ・・・

うーん、趣味みたいなものだからね。これを手に取つて少しでも笑顔になれる人が増えるなら。ただ赤字だと作り続けることができなく

なつちやうから材料代くらい回収できればいいかなあつて」

「ほう、ここでじやなかつたらいいんだね？」

「そ、それは・・・もうアリスちゃんからかうのやめてよお〜！」

「いや、いつも思いますけど花音さんとアリスさん、ホント仲いです

よね

「だつてかのちゃん可愛いから。でも、私的には美咲ちゃんもとつても可愛いよ?」

「あーはいはい。いつものやつですね。ソウデスネーアリガトウゴザイマス」

あらら棒読みの塩対応。でも・・・

「美咲ちゃん、顔赤いよ?」

「花音さん! ばらさないでください!!」

いやー眼福眼福。なんでこう楽しいかなあ。

「よし、時間あるし私もお店、手伝っちゃおう!」

かのちゃんは悪いよ、って言つてくれたけど私がやりたいんだから仕方ない。

「すごい・・・アリスさんが入つただけで売れるスピードが倍増して
る・・・」

「やつぱりアリスちゃんはすごいなあ」

「モノがいいからだよ」

そんなやり取りをしていて一息ついたところで私と美咲ちゃんは
お花を摘むために中座した。
そして戻つていたらまたお客様が来たようだ。

「アリスさん、あれ」

「うん」

かのちゃんが対応しているけど・・・なんか雰囲気がおかしい。

「いらっしゃいませ～」

「これいくらかしら?」

「300円です」

「300円!? こんなもの糸の塊でしょ? 原価100円もしないじゃないの?」

「えっと・・・」

「100円もしないようだけど私が特別に100円で買い取つてあげるわ。ほら」

「こ、困ります・・・」

「何よナマイキね。あんた高校生? こういう時は大人のいうことを素直に聞いて社会にもまれなさい」

一方的に言い寄つて値切る女性。かのちゃんは半泣きになつて、るのを確認して瞬間私は飛び出していった。

「かのちゃん、ごめんね。お待たせしちやつたね。お客様?」

「アリスちゃん! えっと、その・・・」

「私が原価100円もしないソレを100円で買ってあげるところよ」

「そうなんですか! ジヤあ(用意しますね!)」

「アリスちゃん! ?」

「いいから、まかせて?」

私は店のストックケースに入つてあるモノを取り出す。

「ねえかのちゃん。あみぐるみに使う毛糸はどれくらいの量かな?」「えっと・・・」

かのちゃんが取り出した量よりちょっと多めの量をもつて私は件の客(モドキ)のところへ戻る。

「おまたせしました～」

「なによこれ?!」

「何つてご希望のモノですけど？」

「ただの毛糸の塊じゃない！」

「だつて100円しか払わないんですよね？だつたらそれ相応の材料代しかでませんよ」

「だつてそんな原価100円も・・・」

「原価原価つておっしゃいますけどね。それに技術料が乗つかるのは当たり前ですよ。原価で売買してたら成り立たないし次の制作もできません。大人なのにそんな世の中の当たり前の仕組みすら知らないんですか？」

「生意気な・・・！」

「生意気？すみませんね、貴女みたいな大人より世の中の仕組みを理解していく原価原価喚いてケチくさい値切りという高等技術をしない子供で」

皮肉たっぷりに言い返す。

いや～こういう時は口が回る回る。こういうバカつて煽ると大概ヒステリーコースして煙に巻こうとするんだよね。

「キイー！」

「分が悪くなつたらヒステリーコースして煙に巻こうなんてどんだけ頭悪いんですか？」

想像通り過ぎてなにも言えないわこれ

“ そうだそうだ！”

“ ひつこめ！”

“ それくらい普通に買いなさいよ！”

知らない間にギャラリーができておりヤジが飛ぶ。

「覚えてなさい!!」

そしてその客モドキは顔を真っ赤にし、いまだき聞かないような捨て台詞を吐き雑踏の中へ消えていったのでつた。

“姉ちゃんすごいな！”

“かっこいい・・・”

“わたしもあんな風になりたいわ！”

「あーどもどもお騒がせしました。あ、そうだーよかつたら皆さん、あみぐるみ買っていくくださいね♪」

その日、かのちゃんのあみぐるみは完売したのであつた。

※

「アリスちゃん、今日は本当にありがとうねっ・・・！」

「いいのいいの。ああいうバカはストレートに言わないとわからないからね」

「バカとはまたストレートですね・・・」

「だつてバカでしょ？」

「まあ、バカでしたけど・・・」

そんな会話をして帰り道を歩く。

「やつぱりアリスちゃんはすごいなあ・・・あんな風に怖い人に言い返せるなんて」

「人生経験の差ですかね」

「アリスさん、花音さんと同い年ですよね・・・？」

「うむ、よいツツコミだぞ美咲ちゃん」

「掴みどころないなあほんと」

「うふふふふ」

「あそудだ！今日完売したからいつもより多くお金残つたんだ！お礼につぐみちやんのお店でお茶していかない？」

「いいの！？やつたあ！」

トラブルがあつたけど今日は本当に楽しかつた。そしてアフターのお茶女子会！つぐみちやんにも会えるし最高の休日ね。

……ただあの手のバカつてこれで終わらない気がするんだよね。交通事故起こしてもなぜか警察じやなくて彼氏(○)に連絡したり、彼氏(○)に頼つて連れてきてお礼参りにくるパターンが多い。何この彼氏の万能感。

え？ フラグ？ いやいやそんなタイミングよくそんなことあるわけないじやないですか。やだなあもう。

「みつけたわ！」

「あいつがお前を邪魔したガキか？」

「・・・・・」

「さつきはよくも恥をかかせてくれたわね！ 彼氏を連れてきたから！ 後悔させてやるわ！！」

「・・・・・」

「おいおいビビッて声もでてねーじやねーか w w w」

「あらあら～？ さつきの威勢はどこいったのかしら～？ w w w」

煽る二人。バカども

「アリスちゃん・・・？」

「アリスさん・・・？」

そして不安そうに私の名を呼ぶ二人。しんゆうたち

なんで・・・

「なーんでこうなるのぉ～～～～～!?!?!?

目の前に現れたそれに私は心底辟易し、このあとの楽しい女子会が台無しになってしまったという現実に心の中で涙したのであった。

第2話 フラグ回収士——後編——

「なんですか？用事ですか？まさか自分で解決できないからって無関係で力に差がある男性を連れてきて威圧して委縮させて勝ちに来たなんてとても大人がやるような情けない理由じやないですよね？」

「な……！」

「言葉に詰まつてますけど……まさか団星ですか？悪知恵しかもつてないわりには行動が短絡的なんですよね。自分が動いた結果どうなるかを全くイメージできてない。いや、こんな大人にはなりたくないですね」

煽りに煽つて煽りまくる。

「そつちの彼氏さんもすごいですね、私が同じ立場だつたら恥ずかしくて来れませんよ。200円ぽつちを得するために18の小娘にケンカ売つて結果口で負けて恥をさらしてヒステリーよこして逃げた彼女のためにその小娘を威圧しに来るなんて。すつごく彼女さん想いなんですね。まあレベルは同レベルまで墮ちてますけどこれも愛のカタチというのであればまあ……」

イラライラが收まらない私は頭に思い浮かんだことをポンポン口に出す。

だつてしかないじやないの。いい気分で休日を終えようとしてるところに不純物が混ざつたら誰でもこうなるよね？

「かのちゃん、美咲ちゃんゴメンね。この人たち私に用事みたいだから先に行つてて？」

「で、でも……」

「さすがに一人にするわけには

「いいのいいの。それにね、貴女達が一緒にいたところで何もできな
いから」

しまつた、イラつきでちよつとキツイ言い方だつたかなあ・・・

「大丈夫、これでも話し合いは得意なんだから！ね？」

すぐに雰囲気を和らげる。

それが聞いたのか、かのちゃんと美咲ちゃんは意外とあっさり引き下がつた。

「さて、お待たせしました。それで私に何をお望みなんでしょう？ 200円でも払えればいいんですか？」

「さつきから黙つて聞いてたけどコイツマジでムカつくわ。お前の言つた通りだつたな」

「でしょ!?こんな感じで大勢の前で因縁つけられて・・・すづぐく恥ずかしい思いさせられたんだから・・・」

「おーよちよち。可哀そうにね〜」

「え、キモツ・・・」

「てめー今なんていつた？」

「今夜の晩御飯はアンキモにしようかなつて」

「さすがにそれは苦しいだろ?!」

バカにツッコミを入れられてしまうとは不覚だなあ。

「こいつが恥ずかしい思いしたつてんならお前も恥ずかしい思いさせ
てやる」

「え〜なんですか服でも？ いで写真でも撮ろうってんですか？」

「よくわかってるじゃないの！ そうなればあんたは終わりよ！」

「曲りなりともJ Kなんで児童ポルノ法違反ですよそれ

「うるさい！ やつちやつて！」

「オラア！」

男がこちらにやつてきて女は勝ち誇った顔をしている。うーん、結局暴力があ。やりすぎないようにしなきや。

「意気揚々と走つてきますけどほんとにするんですか？」

「当たり前だ！ボコつて裸にひん剥いて写真に撮つてやる」「はーい、危害を加えるつて言質いたきました！」

「は？今さらなにを・・・」

「貴様こそ調子に乗るなよクソガキ」

ボコオ！

「・・・・・は？」

「あらら、一発KO。まあ正当防衛だし・・・いいよね」

こちとら18歳だけど実際はピー（自主規制）年くらい生きてるんですよ。

20そこらの男なんてガキといつても差し支えないでしょ？

「あ、あ、あ、あ、あ」

ニヤニヤしていた女の顔が一瞬で間抜けヅラになる。

手加減したつもりだつたけど思いの外勢いあつたから力入っちゃつた。まあ前みたいに腕をぶつ壊したわけでもなく鳩尾にパンチ入れただけだから大丈夫だよね？

「え？ちょっと冗談辞めよ。遊んでないで早くやつちゃつてよ」

「・・・・・・・」

「キレーに入つたんで当分起きないと思いますよ」

「きやああああ」

「悲鳴上げるのつて立場的に私だと思うんだけどなあ」

「じゃあお姉さん、警察いきましようか？」

「け、警察!？」

「そりやそうよ。もしかして恥ずかしい写真撮つて脅せば何の問題もないって来ました?でも残念、現実はあなたの彼氏が負けてこの惨状。そりや危害を加えられた身としては警察に頼るのが筋つてものでしょ?」

「警察はやめて……！警察になつたら両親にこんなことやつてるつてバレる……！大学も退学になつちやう!!」

「大学生だつたんですか。でも残念。悪いことしたら捕まる。んーでも条件を飲んでくれるなら見逃しますよ。正直私も早くいきたいんで」

「ほ、ほんと!?」

「ええ、その条件は……」

※

要件を済ませた私は急いで羽沢珈琲店へ向かう。

ちなみに私が要求した条件はノビてる彼氏と一緒に動画撮影し、自分がやつた事をすべて喋らせたのだ。フリマのこと、彼氏を連れて仕返しに来て逆に負けたこと、警察呼ばれると困ること。そして二度と私や私の周りに近づかないこと。これを彼女の口からすべて言わせた映像を手に入れた。こんなものが表沙汰になつたらあの二人は恥ずかしくて表を歩けないだろうからこれでもう絡んでくることはないだろう。

「ごめーん！おそくなっちゃった！あ、つぐみちゃん!!今日も可愛いいね～」

「もうアリスさんつたらいつもそんな調子のいいこといつても「とかいつていつもサービスしてくれるつぐみちゃんのこと、お姉さん大好きよ～？」

頭に手を置きポンポンするとつぐみちゃんの体温が上がるのをわ

すかに感じる。

あ、あちらの席です！」

あはは
ありかど
ぐみぢやん

嬉しそうかつ心配そうな顔に変えた。

「アリスちゃん！大丈夫だつたの!?」

「どうどう、一人とも落ち着く?」

せん！ キレーさつぱりいつもの志賀有栖だよ」

「あ、うあ、う、
かの、」

「でもどうやつたんですか？」

「いつたでしょ？私って話し合いが得意なの。じつくり話して無事円

八一

じつくり（意識なし）円満解決（物理）だけど嘘は言つてないよ。嘘
は。

「そんなことよりスイーツだ！つぐみちやーん！」
「あ、はーい！ただいま！」

力技で空気を変えることにした。

ここまでやれば勘のいいかのちゃんや美咲ちゃんのことだ。これ以上は追及してこないだろう。

「ん～～～～～おしいしいい～～～！甘いものは女子の原動力！糖質？脂質？そんなものはしらん！」

「アリスちゃん、こっちのも少し食べる?」

「え!? そんな・・・いいのですか花音サマ」

「あはは・・・サマつて」

「じゃあ私もどうぞ! 美咲ちゃんもシェアする?」

「じゃあお言葉に甘えて」

甘いものを肴にコーヒーを飲みワイワイする・・・
これぞ女子会!

「かのちゃんはさ~好きな人とかいないの?」

「ふえええええ!!」

女子会といえばコイバナでしょ。

え? 偏見? 別の世界だとたいてい盛り上がり上がったんだけどなあ

「おお? その反応はいそうだね! どこ誰? どんな男? 私が見定めてあげようか?」

「い、いないよ! 好きな男の人なんて! 女子高だし! 断じて」

「必死になつて否定するの怪しい」

「・・・まあ男は、いないかもですよね花音さん。男は」

「み、美咲ちゃん!」

「・・・まさか女の子同士!?

「へ、変だよねやつぱり」

否定しないだと・・・?

ここでかのちゃん、まさかの女の子同士がOKである。

まあだからといってかのちゃんはかのちゃんだしそれも個性だ。
否定する必要は全くない。

「ん~別に変じゃないと思うよ? 誰を好きになつてもそれは紛れもない大切な想いだし、それがたまたま女の子同士だつたって話でしょ?」

それも個性だし私だつたら女の子からこう、恋愛的な意味で好きで
すつて言われたら嬉しいけどなあ」

「ホント!?

「お、食いつくねえ。ホントホント。だからいつかその想いが伝えら
れるといいね」

そつかうかのちゃん好きな人いるんだ。

こんなかわいい子に好きになつてもらえるなんてどんな人だろ?
もしかしてウチの学校なのかな?まさかハロハピの誰か?もしか
してちーちゃん?

「気になる〜!教えて教えて!」

「アリスちゃんだけには絶対教えられませんっ!」

「ガーン!」

「いや□で言うんですかい」

美咲ちゃんのツッコミがはいると同時に頭を除夜の鐘を鳴らす棒
で殴られたような衝撃が襲う。

「そつか・・・そうだよね・・・めんね私」ときがデリケートな話題
に首を突っ込んで・・・」

「え?!いやそうじやないの絶対っていうのは言葉の綾でその・・・とに
かくごめんなさい!」

まあ言いたくないこともあるよね。

私は顔を真っ赤にしてあたふたするかのちゃんが可愛いから復活
することにし、残りのケーキに手を付け始めたのであつた。

「・・・アリスさん、わかつてやつてませんよね・・・?」

そんな様子を見ながらボソッと美咲ちゃんが何かをつぶやいたの

であった。

※

これで私の慌ただしい休日は終わった。

今日の教訓。モノの価格にはその技術料、流通過程でかかる費用も見越してあるので原価がいくらだからもつと安くできるはずだからと安易に決めつけてはいけない。（もちろん必要以上に高くしてぼつたることや、買い占め転売などもつてのほかだ）

そして誰がどんな趣味嗜好を持つていようとそれが法に触れたり獵奇的なものでないのであればそれは個性であつて否定していいものではないということだ。

さて、明日はどんなことが起きるかな？

願わくば、引き続き平和で普遍的で女の子に囲まれた一生を終えられますように。

え？ やっぱり手遅れ？ しらんがな。

おはよう、私が愛す世界よ。

第3話 モニカのふたり

「あれー？ つくしちゃんに七深ちゃん？」

「アリスさん？」

「アリスさん、どうもです！」

前回とは別の日の休日。私は駅に向かう途中、双葉つくしちゃんと広町七深ちゃんに出会った。

「今日は二人でデートかなー？」

「いやデートなんて」

「普通に休日に友達とお出かけしてるだけですよ、普通に」

「七深ちゃんらしいなあ」

相変わらず七深ちゃんの普通へのあこがれはすごいよね。

「アリスさんはどうしたんですか？」

「んー？ 私は映画でも観ようかなって思つてさ」

「え？ そうなんですか？ 私達もなんですよー」

スマホの画面を見せてもらうとなんとそれは私がこれから観に行こうと思つていたものと同じだった。

「こういつちやアレだけど……つくしちゃんと七深ちゃんってB級映画マニアかなにか？」

そのタイトル。メジャーな出演者はほとんど出ておらず上映館も極端に少ないまさにB級映画のであった。

「いえ、そういうわけじゃないんですけどね。私がたまたまこの映画に出演している人のファンでモニカのみんなを誘つたんですけど

ど・・・

「予定が空いているのが私しかいなかつたという感じですね～しろちゃんは家族とお出かけ、とーこちゃんはおうちの用事、るいるいは習い事だそうでして」

「なるほどね～実は私もコレ、観に行くつもりだつたんだよね。私は普通にB級映画好きでして」

「・・・普通？」

「そ、普通だよ普通」

「・・・実は私もB級映画好きなんですよ～」

「・・・私の普通は他の人と違うかも？」

「・・・やっぱそうでもなかつたです～」

「あつはつは。七深ちゃんは可愛いなあ」

「もう一人とも。漫才やつてるんじやないんだから」「これぞ普通にこだわる広町七深ちゃん。いやーこの子に絡むと楽しいなあ

「もう一人とも。漫才やつてるんじやないんだから」

「ツツコミをいれるつくしちゃん。

「漫才か・・・アリス＆ななみんなんてどう？」

「それにのつかる私。」

「お～なんて捻りのない名前。これは名コンビ結成ですね～」「けなしてると褒めてるんかどつちなのかな～ん？」

「あわわ、アリスさん苦しいです～」

「えいえい。怒つた？」

めちゃくちゃ弱い力でツンツンする。
完全にポプテ○ピッ○のそれである。

「わわつ。なんて躊躇のない盗作」

「盗作元もパロディの宝庫だからセーフセーフ」

「二人の世界になつてる・・・」

おつと、つくしちゃんを置いてけぼりにするのはよくないね。

「つくしちゃんもおいで？アリス&ななみんwithつーちゃんの結成だね」

「早くいきますよ!!!!」

怒られてしまつた。確かにあまり時間もないね。なんせ上映館少ないうえに上演回数まで少ない。1つ逃すと何時間も時間をつぶさねばならないことを考えるとそろそろいかねば。

「そういうえばアリスさん、いつも一人なんですか？」

「ん、そういうわけじゃないんだけどね。たまーにふらつと誰にも気を遣わずに休日過ごすのが好きなんだよ」

「あれ？じゃあ私たち邪魔なんじゃ・・・」

「ぜーんぜんだいじょーぶ！むしろ会えて嬉しかつたよ？二人とも学校違うからなかなか会えないしね。相変わらず可愛いし」

「調子いいなあもう」

「いつも通りですね〜」

※

「うーん！よかつた～！」

映画を観終わつた私は伸びをしながら感想を口にする。

「こういつちやなんですけどそんなに良かつたですか・・・？」

「ぶつちやけ結構アレだつたよね！」

「うん、よかつた！期待を上回るクソ映画で満足だよ!!」

「あつ・・・そういう意味でしたか」

「さすがB級映画マニアですね」

開始15分で観る気が失せる演出、半分くらいでオチが読めるシナリオ、演技力ガバガバな役者の演技。まさに芸術である。

「いくら好きな役者さんが出でいてもアレは辛かつたです・・・」

七深ちゃんは涼しい顔をしていたがつくしちゃんは結構げつそりしていた。

「よし、映画も終わつたことだし口直しにお茶していかない？」

「口直しつて言つちゃつたよ」

「いいですね～」

「んじゃお店探しますか」

スマホで適当に検索するとよきげなカフェがあつたのでそこに入ることにした。

「うん、なかなか美味しいね」

出されたコーヒーの香りを楽しみ、一口飲んで咀嚼する。

「この店主、なかなかやりおるわ」

「アリスさんそんなキヤラでしたつけ？」

「私のキヤラなんて変幻自在よ」

「相変わらずですねえ～」

他愛のない会話で駄弁る私たち。うん、これぞ女子高生青春の1

ページ。

まさに普通のJKライフである。

「……臭いわね」

「臭いですね」

「臭いです」

と思つたら何やらニオつてきた。

その正体はすぐに分かつた。タバコである。目線の先を見ると若い女性数名がタバコをふかしながら談笑していたあれ?この店禁煙では……?

「お客様、申し訳ありません」

と考えていた矢先スタッフさんが注意していた。

うんうん、すぐに動いて注意できるのは素晴らしいことである。

「はあ?なんでそんなこと言われなきやいけないわけ?」

「しかし他のお客様のご迷惑に……灰皿もおいていませんし」

「うるさいわね。携帯灰皿もつてるからいいでしょ?」

うーん、この。

まあアレよね。禁煙つてわかってるところでタバコ吸うような奴が素直にいうこと聞くわけないよね。

あ、喫煙自体は全然いいんだよ?問題はマナーをしつかり守れるかどうか。

こういうアホが悪目立ちするせいでマナーを守っている善良な愛煙家の皆さんまで偏見の目で見られちゃうのはかわいそうだと思う。

「迷惑迷惑つていうけど誰も迷惑つて言わないじゃん!ほら、誰か迷惑つて思つてる人いるわけ!」

でつかい声でめちゃくちやなことをいう。そりやアンタらみたいなアホに誰も関わりたくないから誰も声上げないでしょう。わかつててやつてるなこいつら。

「迷惑です！」

つていたわ！しかも目の前に!!眞面目委員長さんが!!!

「あら？ 中学生には聞いてないわよ！」

「ちゅ、中学生じゃありません！高校生です!!」

「ふーん、で？だからなんなの？あんた一人が迷惑がつてもだからなんだつて感じだけど？」

ふーとタバコの煙をつくしちゃんに吹きかけるアホ。聴いたのアントですやん。

「ケホケホッ・・・やめてください！」

「やめてほしけりや消してみなさいよ！」

「ひやつひやつひやつ！」

「つーちゃん、大丈夫!?」

全員で笑いだすアホ共に半泣きになつてるつくしちゃん。そして自身に抱き寄せつくしちゃんをかばう七深ちゃん。

バシヤツ！

「うわっ！冷たツ！」

「消してみろっていうから消してみましたけどこれでいいんですかね？」

そしてその光景を見た私は、とりあえず消すのを^(一)所望だつたよう
なので手に持つていつたお冷をタバコもろとも顔面にぶつかけて
やつた。

「何すんのよ!?

「え〜? 消してみろつていつたじやないですかあ〜」

「こんの!」

「いい加減にしてください!! 警察を呼びますよ!!!!

その瞬間現れたのは店主と思しき人。

一喝した瞬間、アホどもは『警察は困るわ』とか抜かしてそそくさ
と帰つていつた。だつたら最初からこんな騒動起こすんじやないつ
ての。

「ふえ〜・・・」

「あ、つーちゃん腰抜けちやつた」

「怖かつた・・・」

「大丈夫ですかお嬢さん方?」

店主さんはさつきとは打つて変わつて柔軟な笑みを浮かべて話し
かけてきた。

「ごめんなさい、騒ぎを大きくしてしまいました・・・」

「いえいえ。お嬢さんの勇気、立派でしたよ。きっと親御さんがとつ
ても良い教育をされたのですね」

「あ〜私も床を濡らしてしまいましたね」

「それくらいこちらで掃除しますよ。ご来店中のお客様方もお騒がせ
しました。この場にいるお客様のお会計は私が持たせていただきま
す」

太つ腹な店主さんの厚意に甘え、私たちはその後も楽しく過^(二)した
のであつた。

※

店を後にした私たちは帰り道を歩く。

「今日は大変な1日になっちゃったね」

「本当にごめんなさい、私が騒ぎを大きくしちゃって・・・」「さつきの店主さんもいつてたけどすごく立派だと思うよ」

「あれぞつーちゃんつて感じだったよね。そういうところ、やつぱ尊敬しちゃうな〜」

「そ、そんな尊敬なんて」

「私もすごいと思うよ。素直に尊敬しちゃう」

「もう〜！そんなに持ち上げないでください!! 何も出ませんよ!?」

顔を真っ赤にするつくしちゃんはとても微笑ましい。

「可愛いなあ。ぎゅーー」

「なんで抱き着くんですかあ!?」

「これは広町的にもいい絵面ですね〜」

「七深ちゃんもおいで?」

「わーい」

「わーいじやなああああい！恥ずかしいからやめてください〜〜〜

」

ああ、今日も平和だ。

学校の違う可愛い後輩たちと一日遊ぶのも楽しかった。

今日も普通の女子高生でいられたかな？

願わくば、引き続き平和で普遍的で女の子に囲まれた一生を終えら
れますように。

え？だから手遅れだつて？だからしらんがな。

おはよう、
私が愛す世界よ。

第4話 市ヶ谷有咲とワタシの関係

「お姉ちゃん……？」

とある休日、街を一人で歩いていると女性に声をかけられた。

そちらのほうを向くとそこにはいかつい男を数名連れた若い女性。

「あ、すみません……あまりに亡くなつた私の姉に似ていたものです
から……」

「千耶……？」

思わずつぶやいてしまった。

私は思い出す。いくつ前の世界だろうか？

私の記憶にある関東最大の広域指定暴力団・志賀組の組長宅襲撃。
敵対する組が送り込んだヒットマンが組長宅に乗り込み、組員数名と
たまたま居合わせた組長の娘を殺害したという事件だ。そのあとの
ことは知らない。

だつてその時死んだのがその世界にいたころの私なんだから。

「やっぱリアリスお姉ちゃんなの……？なんで……？どうして……
？」

「千耶!!」

全力で飛び込んでハグをする。

そこにいたのはその世界での私の妹。志賀千耶の姿であった。

※

「まさかあの世界とこの世界が繋がっているなんてなあ……えつと私が死んでから何年になるのかな？」

「20年だよ」

私はかつての妹にすべてを話した。信じてもらえるとは思えなかつたんだけど全く疑いもせず信じてくれた千耶。いやいや、まさか再び会う日が来るなんて思つてもみなかつたよ。

「そつか。今はあなたが？」

「うん。組を仕切つてる。そうでないと後継争いで内部抗争になりそうだつたし」

「あの可愛かつた千耶がなあ。えつと当時の千耶が10歳だから……今は30歳かな？」

「お姉ちゃんは逆に全然変わつてない……いや、違うか。変わつていないうお姉ちゃんになつてだけかな」

「私が死んだのが18の時だからあの時と同じ年齢ね」

その後はしばらく姉妹水入らずで話した。
近況のこととか色々ね。

「お姉ちゃん、ウチに来る気はない？」

「……氣持ちは嬉しいけど今の私は戸籍上、亡くなつた志賀有栖と同姓同名の人物つてだけだからね。それに私は今あるみんなとの関係を大事にしたいんだ」

「そつか。でもせつかく会えたんだしなんでも頼つてね？こう見えても私、強くなつたんだから！」

「そりや天下の志賀組の組長様だもんね。うん、ありがとう。いざというときは頼りにさせてもらうね」

こうして私たちとは連絡先を交換してわかれた。

思わぬところで再開した妹。長い間、あまたの世界を渡り歩いて生き、そして死んで繰り返してきたけどこんなこと初めて。きつとこの世界においてとても強い武器となるであろう。私はそう安堵したのであつた。

※

「ばーちゃんただいま」

「お帰り～有咲ちゃん。ごはんにする？お肉にする？それとも…サ・カ・ナ？」

「ええ…（ドン引き）」

私は有咲ちゃんの家に用事がありお伺いしたところまだ帰つてい
ないとのことだつたので待たせてもらうことにしたのだつた。そし
て無事帰宅を果たした有咲ちゃんをエプロン姿でお出迎えしたわけ
である。

「なんでアリスさんがいるんですか！？」

「ちよつと有咲ちゃんに用事が～（以下略）」

「なるほど。いや用事あるなら学校でよかつたのでは？」

「ん～ちよつと野暮用でタイミングがね～」

「なるほど。とりあえず家に入れてもらつていいですかね？」

「おつとごめんよ」

そういうつて有咲ちゃんは家に上がる。
きちつとした姿勢で靴を脱ぎ、きれいにそろえるその動作には育ち
の良さがにじみ出ている。

「あ…」

「どうしたの有咲ちゃん??」

「ごはんもお肉も魚も全部食べ物じゃないですか…・・・どんだけ食欲旺
盛にみられてんですか私…・・・」

「タイムラグのあるツツコミも好きよ」

「そこはご飯かお風呂か…・・・」

「お風呂か…・・・？」

「そ、その…・・・ワタシ…・・・つていうところじゃ…・・・」

恥ずかしそうに顔を伏せる有咲ちゃん。完全にツッコミが數蛇になつてゐる。ここはお姉さんらしく対応しなきや。

「なあに有咲ちゃん? ワ・タ・シがよかつたのかなうん?」

「しりません!!」

「あーん、待つてよ~」

後ろから顔を近づけてくついたら有咲ちゃんがショートしそうになつたのでそのままを堪能しつつ、有咲ちゃんの背中を追うのであつた。

※

「ほんとにお肉も魚もあつた・・・」

「さあ、召し上がれ♡」

有咲ちゃんを待つてゐる間、暇だつたので有咲ちゃんのおばあちゃんにキッチンを借りて市ヶ谷家の夕飯づくりを担当させてもらつていた。こう見えて料理は得意、というかとある前の世界では調理師をやつていた時代もあつたからうまくやる自信はあつたのである。

そしてメニューは見事肉も魚も取り入れてあるものにしたのだ。

「もぐもぐ」

「どうかな・・・?」

「美味すぎる・・・!」

「やつたあ!」

どうやら大変好評のようである。

「なんか至れり尽くせりですいません」

「私が好きでやつてることだから」

ご飯を食べながら雑談する私たち。

他愛のない話で盛り上がり、隙を見て有咲ちゃんをからかつたりセクハラしたりとても楽しい時間だ。

「有咲ちゃんあの写真・・・」

「ん？ああ、私のお母さんの遺影です。私が小さいころに病氣で死んじやつたんですけどね。そういうばうちのお母さんの有栖つて名前だつたな・・・」

「え、すごい偶然！じゃあ私たちは実質親子でいいのかな??」「なんでそうなるんですか!!!」

「冗談冗談。さて、私はそろそろ帰ろうかなあ」

「アリスさんが結局来た目的ってなんだつたんです？」

「ん~もう済んだかなあ」

「ええ・・・なんか要領を得ないですわ」

「まあ有咲ちゃんにご飯を作つてあげたかつたつてことで」「うわあ~適当だあ~」

そんな会話をしながら玄関に向かい、ドアを開けたところで私はずぶぬれになつた。

「ファツ!?」

「うわ、すげー雨風!?アリスさん!!とりあえず閉めて！閉めてください！」

有咲ちゃんに言われピシャつとドアを閉める。

どうやら外は急に天候が崩れ、嵐のようになつているようだ。

「うわーこれ一晩続くみたいですね」

「マジかあ・・・」

天気アプリを見ながら有咲ちゃんが教えてくれる。

「んー困ったなあ。ねえ有咲ちゃん、雨合羽とかある? あるなら貸してもらえば何とか帰れると思うからさ」

「いやいやこんな嵐の中放り出すわけにはいきませんって!」

「んうそうはいつてもなあ」

うーむと考えていると有咲ちゃんのおばあちゃんがやつてきてこんな提案をする。

「今夜は泊まつていきなさいな」

※

「アリスさん、湯加減どうですかー?」

「最高ですかー有咲ちゃんも一緒にに入る?」

「入りません!! タオルと着替えここに置いておきますから!!」

「つれないなあ」

ズぶぬれになつてしまつたのでお風呂をいただくことにした。

ちようどよい湯加減に市ヶ谷家の広いお風呂はとても快適である。

「し、失礼します」

「あれ、有咲ちゃん??」

「ばあちゃんがせつかくだから一緒に入れつて」

「サンキユーバツバ」

結局一緒に入ることになつた私たち。

「よし、洗いつこしよう!」

「洗いつこするのになんで驚掴みする手の形してるんですか!? ぎゃあ

あああああ

「おお、でけエ……」

「うう……いつもやられっぱなしの私じゃないですよ!」

「わわっ有咲ちゃんつたら大胆」

刹那、有咲ちゃんに鷺掴みにされてしまった。

「・・・・でけエ」

「そりやどうも」

いや、私もそこそこサイズに自信あるけどさ。あなたの方が明らかにでかいからね?

「なんか全然動じなくてちょっと悔しいです」

「生乳掴まる程度じゃねえ」

「どの程度なら動じるんですか!?」

そんな戯れをしていたらあつという間に時間が経過する。
さすがに長すぎ、騒がしそぎということでおばあちゃんにお叱りを受けてしまったので一通り入浴をすませて出ることにした私たちであつた。

※

「パジャマに下着まで貸してもらつて申し訳ない」

「いいですよ。アリスさんは洗つて乾燥機かけてるんで」

「何から何まで申し訳ない」

「晩御飯の御礼つてことで。あ、寝るときにブラはつける派ですか?」

「あ、つけない派なんでそれは借りなくて大丈夫だよ!」

「了解です」

借りたとしても若干有咲ちゃんの方がでかいからね。少し惨めになりそうなのでつけない派でよかつたと思う。

「なんか不思議な感じです。アリスさんが家にいて一緒に寝てるなんて」

「有咲ちゃんと今までこういうことなかつたもんね」

「なんで私だつたんですか？」

「・・・んー・・・ある人との約束を果たしただけ」

「ある人・・・？」

「やっぱ何でもない。私の自己満足つてことにしておいてよ」

※

千耶ちゃんに再会した件で、他にもどこかの世界とつながっているのでは?という疑念が生まれた。色々調べると、少なくとももう一つつながっている世界があつたのだ。

それが、私が調理師をしていた時の世界。その時に親友だったのが本郷有栖（ほんごうありす）だ。高校で知り合い同じ名前で趣味も一緒にすぐに意気投合し親友となつた彼女。同じ名前だったので、区別するために私が彼女を「あーちゃん」と呼び、彼女は私のことを「りーちゃん」と呼んでいた。そして大人になり、私は調理師、彼女は結婚して専業主婦になつて、名字が市ヶ谷に変わつた。

「え?!あーちゃん妊娠したの!?’

「そうなんだ〜」

「おめでとう!!」

ある日呼び出されて何かあつたのか!?と身構えていつたらとても嬉しい報告であつた。

「いやあ・・・あーちゃんが母親か・・・感慨深いですね」

「ありがと。りーちゃんはいい人いないの？」

「私の恋人は当分包丁と鍋だよ」

「あはは、そつか」

親友に子どもができた。こんなにうれしいことはなかつた。

「そつか～じやあ私も生まれてくる子においしいものを作れるように腕を磨いておかなきやなあ～」

「りーちゃんの料理、めちゃくちゃ美味しいじゃない」

「もつとだよもつと！あーちゃんの子どもに下手な物は食べさせられないし」

「大げさだなあ。でもありがと、楽しみにしてるね」

「うん、約束する！その時まで乞うご期待つてことで!!」

その日の帰り、私は死んだ。

高齢者が運転する暴走車があーちゃんの方へ向かつてくるのを確認した私は瞬時にあーちゃんを突き飛ばした。それがその世界での私の最後の記憶だ。

実は、今まで有咲ちゃんに正体のわからない親近感がずっとあつた。

そのせいか他の子よりスキンシップが激しめであつた自覚もある。そして千耶ちゃんとの再会、そしてさつき見た有咲ちゃんの母親の遺影・・・すべてが繋がつた。

やつぱり有咲ちゃんはあの時のあーちゃんの子どもだつたんだね。でもあーちゃんが早くに亡くなつているのはとても残念だ。

※

「アリスさん？」

「あ、ごめんね有咲ちゃん。ぼーっとしちやつて」

しみじみと思いだしていたらぼーっとしていたようで有咲ちゃんに声をかけられた。

「大丈夫ですか？」

「うん、まあ」

「なんか歯切れが悪いですね。アリスさんらしくない・・・つてちよまつ!?」

有咲ちゃんが言い切る前に私は有咲ちゃんの布団に潜り込んでぎゅっと抱き着いた。

「ねえ有咲ちゃん。私ね・・・何があつても、世界の全員が有咲ちゃんの敵になつても私は有咲ちゃんの味方であり続けるから」「え、いきなりどうしたんですか？」

「・・・・ぐお」

「つて寝てるし!？」

嘘だ。本当は寝ていない。

あーちゃん。有咲ちゃんがね、私の料理を食べててくれたよ。あーちゃんがもういないのは残念だけど約束、果たせたのかな?
これからは私が有咲ちゃんを守つていくから見ててね。

※

「あのままガチ寝しちやつてた」

「おはようございますアリスさん」

「あ、おはよう、有咲ちゃん」

「起きて早々申し訳ないのですがそろそろ離してもらえませんか?」

「あら、ごめん」

私は有咲ちゃんを解放した。

「いや、あまりに抱き心地よかつたから」

「こつちは緊張してあまり眠れませんでした……」

「え、私」ときに緊張することなんてないでしょ？」

「ありますよ！アリスさんはもつと自分を理解してください!!」

「これ褒められてる？」

そういうながらパジャマを脱ぎ捨てる私。

「せめて前隠してくださいよ！」

「女同士じやんく」

そういうながら顔を覆う掌の指は開かれており可愛いおめめはバツチリと私の胸部を凝視している。このムツツリさんめ。

「えつとアリスさん」

「何かな？」

「昨日のことなんんですけど……」

「やっぱその話よね。えつと、今はまだ話せないけどさ。いつかその時が来たら絶対に話すから。待ってくれると嬉しいな」

「……わかりました」

「うん、素直でよろしい」

さすが有咲ちゃん。物分かりが良くて助かる。でもいつか、話すときは来るのだろう。

その時に備えて今はこの世界を満喫しよう。
おはよう、私の愛す……

「あー！」

「びっくりした!? どうしたんですか？」

「有咲ちゃんも寝る前はつけない派だったよね・・・？」

「ええ、まあ。あれ、あの、アリスさん!? 手が！ 手の形がおかしいです！？」

ちよつと勢いで誤魔化す感があるけど、今はこれでいいのだ。
今度こそ。おはよう、私の愛す世界よ。

第5話 ネコなあの子とか?——前編——

「うわ～時間がやばい!!」

「ぜえ・・・ぜえ・・・アリスさん・・・私はもうダメです・・・」

目を覚ました後、私と有咲ちゃん改めあーちゃん(許可をもらつた)は布団の中でダラダラ喋っていたのであるが、なんとそのままの流れで二人そろつて2度寝。

目を覚ますころには家を出なければいけない時間が迫っていた。全力で走り続ける私たちであるが、有咲ちゃんとの体力の差が響いていてどんどん私たちの距離は開けていく。

「あーちゃん!頑張って!!」

「そんなこと言われてもインドアなんで・・・というかアリスさんの体力が無尽蔵すぎるのでは・・・」

まあ私が体力お化けなのは否定しない。

軍隊にいた頃なんて今やっていることが準備運動にすらならないくらいの訓練してたしね。

「あーちゃん、ちょっと失礼」

「え・・・? つてちよまま!?」

私はあーちゃんをお姫様抱っこして全力疾走に切り替えた。

「急ぐよ~」

「恥ずかしい!? 恥ずかしいです!!」

「我慢我慢」

走り続けているとちらほら花咲川の制服を着ている子たちの姿が見えてきた。

何とかいつも登校する時間くらいに間に合つたのであつたようである。

「もう大丈夫ですからおろしてください！こんなところ知り合いに見られたら……」

「アリスちゃん……？ 有咲ちゃん……？」

「つて花音先輩!? 早速みられたあ！」

「おはつよ～かのちゃん！ 今日も可愛いね!!」

「えつとおはよう……？」

「花音先輩困惑してるから！ とりあえずおろしてください!!」

※

「歩いていたら有咲ちゃんを抱っこしてアリスちゃんがいてびっくりしちゃった」

「ほんとすみません花音先輩……？」

「でもどうして？」

「ふふふ……昨日はこの子とアツイ夜を過ごしたのさ」

「ふええええ!? それって……？」

「アリスさん! 言い方言い方! 確かに(抱き着かれて)暑い夜でしたけど!」

「ふええええええ……」

「花音さんがショートしてる?!?」

「あつはつは」

あー楽しいなあ。

やつぱり日常はこうあるべきである。

「花音先輩……落ち着いてください。こういうことなんです！」

「な、なんだそういうことだつたんだ……確かに昨夜の天気すごかつたもんね」

「そうなんだよね。私は雨合羽でも借りて強行帰宅しようとしたけどあーちゃんに止められちゃって。お言葉に甘えたつてわけ」

「・・・あーちゃん？」

「あ、そつか。まあ心境の変化？ってやつかなあ。呼び方変えたんだ」

かつての親友の娘に親と同じあだ名をつける。これは、これからこの子を絶対に守るという私なりの決意だつたりする。

「アリスさん、なんで急に変えるのか教えてくれなくて」

「まあ細かいことはいいじゃないのよ」

そんなことを話しているうちに昇降口についた。

「ここからは学年が別れるためあーちゃんとはお別れだ。

「それじゃ、私コツチなんで」

「うん、あーちゃん。またね」

「有咲ちゃんまたね！」

「はーい」

あーちゃんと別れかのちちゃんと自分たちのクラスの下駄箱へ向かう。

「でもいいなあ。成り行きとはいえアリスちゃんとお泊りかあ・・・」「じやあかのちゃんもお泊りする？どつか土曜日あたりでさ。私のうちでよかつたら招待するよ」

「ほんと!?やつたあ！」

「せつかくだしーちゃんや彩ちゃんにも声かけて女子会でもする？」

「うんうん！いきなり一人は緊張しちゃうからよかつた・・・」

「かのちゃん？」

「あ、ううん！なんでもないよ！千聖ちゃんと彩ちゃん、来られるとい

いなあ

「二人とも忙しいからねえ」

その後、教室についたらちようどちーちゃんと彩ちゃんが話していたのでお泊りの件を聞いてみた。

「月末の土曜日なら夕方まで仕事だけど次の日はオフだから大丈夫よ」

「私もー！うーん、楽しみだね!!」

無事ちーちゃんと彩ちゃんとゲットした。

その後は4人でお泊り会に向けて色々と計画を練るのであつた。

※

学校帰り、仕事に向かうちーちゃんと彩ちゃん、バンド練習に向かうかのちゃん、生徒会に向かうあーちゃんことごとく振られてしまった私は帰路についていた。

私が住むのは某タワーマンション。どうやらこの世界で私は住むところに関しては相当運が良いようだ。

自分に割り振られた設定を確認する。なるほど、両親を亡くしてその遺産がたんまりあるようだ。このタワーマンションは両親が買ったもので私が相続したらしい。

「あら？アリスじゃない」

「おや？ちゅちゃん？」

「久しぶりね」

そしてエントランスで同じマンションに住む住人、珠手ちゅちゃんに遭遇した。

この子は14歳であるが音楽のプロデューサーとして一人前に仕

事をしているようだ。

バンドメンバーミんなとはしつかりと面識がある。それどころかドラムのますきとはサシで遊びに行く仲だつたりする。

「今日は練習かな？」

「いえ、今日は練習はないわ。各自用事があるみたいでね」
「そつか。でもちゅちゃん、丸くなつたね～昔のちゅちゃんだったらすべてを犠牲にしてR A Sに尽くしなさい！って言つてたのに」「は、恥ずかしいから昔のことを掘り起こすのはやめてくれるから……」

「え～昔つていつてもそんなにたつてないじやん」

「それでもよ！」

「今日はレオナちゃんは来ないのかな？」

「そうね」

「よし、じゃあお姉さんが晩御飯作つてあげよう！」

ちゅちゃん放つておくとビーフジャーキーとかクラッカーとかそんなものしか食べないからね。
お姉さんとしてはとても心配なのです。

「え？！べつにいいわよ」

「まあまあそういういなさんな～同じマンションに住む者のよしみじやん

「材料なんてないわよ？」

「よし、買い物に行こう!!」

「今帰つたばつかだけど!?」

※

「なんで私まで・・・」

「たまにはこうやつて歩いて買い物して気分転換しなきゃ！こもりつ

ぱなしだと気が滅入っちゃうよ?」

「あなたはいつも私のペースを乱してくるわね」

「いやだつた?」

「いえ。気遣つてくれているはわかるから」

「もうちゅちゃんたら可愛いなあー!」

「Wait! それ以上近づかないで!!」

「えー」

「公衆の面前で過度なスキンシップはダメよ」

「過度じやなきやいいの?」

「もう! パレオといいあなたといいなんでそんなににくつつきながら

「のよ! Why!」

「そりやあちゅちゃんが可愛いからに決まってるじやないのよー」

「あなた、それ誰にでも言つてるでしょ?」

「そりや女の子はみんな可愛いですから」

「ドヤ顔で言われても」

そんな他愛のない会話をしながらスーパーの中を歩く私たち。
何気ない、そして余計なことを考えずにこうやつて人と触れ合える
のは嬉しいものだ。

「ちゅちゃん、ハンバーグでいい?」

「任せるわ」

「OK~」

ひき肉とつなぎに使う材料をかごに入れる。

うん、このスーパーは品ぞろえがいい。

※この作品では『』は外国語で話していることを表しています。

『なんてこつた! もうこのひき肉はないの!?』

「えっと・・・ソーリー、アイドントスピーケイングリッシュ」

外国人・・・おそらくアメリカ人だろうか?

女性が女の子に詰め寄つて大きな声で問いただしている。

『じゃあ英語を話せる人を呼んでくれるかしら・・・?』

「えっと・・・どうしよう」

「あの、どうしたんですか?」

「この人が何かを言つているんですけどわからなくつて・・・つてアリスさん?」

「あれ? ましろちゃん?」

そこにいたのは倉田ましろちゃんだった。

困惑するましろちゃんに困つた顔をする女性。コミュ障を発動して借りてきた猫になるちゅちゃん。何だこの光景。

私は英語でその外国人の女性に話をかける。

『ソーリー、彼女に変わつて私が話を聞くわ』

『まあ! なんて流暢な英語! えっとね、ひき肉を買いに来たんだけど棚になくて。最後の1つをそこの子が取つたからもうないのかを聞いたんだけど通じなくて』

『あ~確かに私がさつき見たときにもかなり在庫少なかつたわ。・・・あ、今日特売日みたいね。それで売れ行きがいいみたいね』

『ええ! どうしよう・・・息子にハンバーグを作つてあげる約束をしたのに・・・』

『よかつたら私のやつ持つてく?』

『いいの? あなたも必要なんでしょう・・・?』

『構わないわ。息子さんに美味しいハンバーグを作つてあげてよ』

『ありがとう! この恩は忘れないわ!!』

そういつて女性にひき肉を渡して女性はオーバーリアクションでお礼を言つて去つていつた。

「ありがとうございました!」

「いいのよ。ちゅちゃん。もう出てきても大丈夫よ」「べ、別に隠れてないわよ」

私の背中に隠れていたちゅちゃんはぴょこっと顔を出す。
少し顔が赤い。

「あ、チユチユさん。こんにちは」
「あたなはマシロ・クラタ？奇遇ね」
「えへへ、アリスさんに助けて貰つちゃいました」
「みてたわよ。相変わらず流暢に喋るわね。私より英語上手いじゃない」

「帰国子女に褒められるなんて♪」
「そんなに英語が上手くて嫌味かしら？」
「そんなことないよ♪」

「えつとチユチユさん、そんなに怒らなくとも」

ましろちゃんがどうしよ、仲裁しなきや・・・つて顔で見ている。

「だいじょーぶよましろちゃん。ちゅちゃんチキンが発動したのが恥ずかしくて強がつてるだけだし」

「誰がチキンよ!?」

「ハンバーグやめてローストチキンでもつくる?」

「あなたのそういうところ本当に掴みどころがないわ・・・」

「うふふふ」

ちゅちゃんは諦めたようだ。

「でもアリスさん、よかつたんですか？ひき肉」

「ん、ああいいよいよ。つてちゅちゃん、ハンバーグがダメになつたからつてそんな落ち込んだ顔しなくても」
「お、落ち込んでないわよ!」

どうやらちゅちゃんはハンバーグのハラになつていったようだ。

そんな中で私がひき肉を譲つたのでちよつと落ち込んでいるのだろう。

「こういう可愛いところはやっぱり14歳ね！」

「だいじょーぶ♡ミンチ機使つてひき肉も自作するから♡超粗挽きの肉！つて感じのハンバーグつくるね♡」

「前から思つてましたけどアリスさんつてすごいですね・・・」

「・・・今さらだわ」

「コラ一人を人外みたいにいわないの〜！」

こうして私たちはひき肉用のお肉を買いなおし、スーパーを後にしたのであつた。

第5話 ネコなあの子とか?——後編——

「私までよかつたんですか・・・？」

「いいのいいのせつかくだから」

スーパーの帰り、買つたものを自宅に届けたましろちゃんと合流した私達。

ちゅちゃんに私の食材を持ち帰つてもらい先にマンションで待つているの。

あそこで会つたのも何かの縁せつかくなので3人で食卓を囲おうという魂胆である。

「ふふ、アリスさんの手料理食べたつてみんなに自慢できちゃう」「え、そんな大したものじゃないでしょ?」

「アリスさん月ノ森でもすつごく有名なんですよ?花咲川にすつごく綺麗な人がいるつて。性格もよくて何でもできてファンクラブまであつて・・・」

「ストップストップ。え、なにそれは・・・(困惑)」

目をキラキラさせながら饒舌になるましろちゃんを制止して聞き返す。

なんかものすごく美化されている気がするよ・・・

「実際知り合つて話してみたら本当でしたし、とにかくアリスさんはすごいってことです」

「実感ないなあ」

「この前つくしちゃんと七深ちゃんがすつごく自慢してきたんですよ。一緒に映画見て甘いもの食べたんだよつて」

はじめて会つた印象はあまり自信なさげであまり自分から話すことはなかつたましろちゃん。しかしこうやつて素を見せてたくさん

話してくれるのは嬉しいものだ。

「あ、すみません。わたしづかり話して・・・」

「いいのよ～ましろちゃんの話はとっても面白いし」

そのまま退屈することなくマンションへの道を歩いた。

「お、おつきい・・・」

「私がすごいんじやなくて遺してくれた親がすごいだけよ」

「七深ちゃんのアトリエもすぐかつたけどこつちはタワーマンション・・・すごい・・・」

「ほら～いくよ～？」

「あ、はい！」

未だ目をキラキラさせているましろちゃんを呼び、私たちはエントランスの方へ向かうのであつた。

※

「超粗挽きにしちゃおう」

「おお・・・」

「なんで女子高生の家にミンチ機が置いてあるのよ・・・」

ミンチ機からにゅ～っと出る挽肉。

せつかくなので肉々しい触感がガツツリ堪能できる超粗挽きでの提供だ。

「ふつーじゃない？」

「それ、七深ちゃんに言わないでくださいね。アトリエにミンチ機が置かれそうなので・・・」

それはそれで楽しそうである。

「しばらくかかるからゆつくりしてよ。あ、冷蔵庫の飲み物とかは勝手に飲んでいいよ」

その後の私は料理に全集中し、ハンバーグ、付け合わせ、サラダ、スープを人数分作り上げたのであつた。

「すゞい・・・おうちごはんなのにハンバーグが鉄板に載つてる・・・！」

実はミンチ機やハンバーグ・ステーキ用の鉄板、その他調理器具を揃えることは私が新しい世界に来て一番最初にやることだつたりする。

調理師だつたこともあり暇だつたら料理を作るし、こうやつて友人に料理を振る舞うのも私の趣味なのだ。

「コラちゅちゃん、あからさまにサラダを避けようとしたしないの」「うつ・・・」

そう、ちゅちゃんはサラダが苦手なのだ。

以前、レオナちゃんから聞いた話であるが、だからといって栄養バランスを考えると食べた方がいいので今回あえてメニューに入れた次第である。

もちろんどうしても無理なら強制するつもりはない。

「生野菜とか海藻とか食物纖維が多いものを最初に食べるとね、血糖値が上がりにくくなるんだから。それにこれはキャベツを使つてゐから油のクッショングにもなるの」

「へゝそうなんですね。私も今度から食べる順番考えなきや」

「うんうん。お米とか麺とかスイーツとか糖質が多いものを一番最初

に食べると血糖値がグンって上がるからねえ。血糖値が上がるといふと体に脂肪が付きやすくなるからこうやつて緩やかに上げていくのがいいのよ」

「勉強になります」

ダイエット必須の知識を伝授したところで私はちゅちゃんに向き直る。

「さてちゅちゃん」

「ううう・・・」

「あ、ドレッシング忘れてた！これかければ食べられるでしょ」

「す、少しほ・・・」

私はドレッシングをかけてあげる。

それをちゅちゃんが恐る恐る食べるのであるが・・・

「これ本当にサラダ!?」

「どうかな？」

「驚くほどおいしいわ。このドレッシングのおかげ・・・？」

「あ、ほんとだ。美味しいですこのドレッシング」

「コレがあれば・・・これはどこで売ってるサラダなのかしら？」

「ん~自家製。気に入つたなら今度から多めに作つて渡すね」

やつた。これならちゅちゃんの絶望的な栄養バランス事情も少しは改善する。

あとでレオナちゃんに教えてあげなきや。

「アリスさんすごく嬉しそう」

「あら、顔に出てた？」

「ええ。私が見てもわかるくらいよ」

「私つてさ。友達はいっぱいいるけど両親いないからお家では一人で

ね。ごはんとかもやつぱ一人で食べることが多くて。だから今日みたいに複数人で食べてしかも私が作つた料理をおいしそうに食べてもらえると嬉しいんだ」

昨日あーちゃんにご飯を食べてもらつた時もそうだつたけど、やっぱり自分が作つたものを美味しそうに食べてもらえるのは嬉しいな。

「私でよかつたら……」

「え？」

「私でよかつたらまた付き合つてあげるわ。暇だつたら……だけど」

「本当!? ジヤア毎日作るね♡」

「毎日は流石に無理よ!!」

ああ、実に楽しい食卓だ。

私は心の底からそういう思い、この時を楽しむことに全力を注ぐのであつた。

※

「本当においしかつたです。明日モニカのみんなに自慢しちゃいます」

「そんな大したものじゃないのに〜」

「いえいえ。透子ちゃんなんてすぐくうらやましがると思ひます」

「あ〜確かに」

外が暗くなつてきたのでましろちゃんを駅まで送るため一緒に歩く。

料理の感想やモニカでの出来事を楽しそうに話すましろちゃん。

「ましろちゃん、本当に楽しそうにお喋りしてくれるようになつたよね」

「普段は全然自分から話せないんですけど……不思議とアリスさん相手ならそんなことないんですね」

「おお、嬉しい」と言つてくれるね～」

他愛のない会話をしていると前方に影を見つけた。

ロングコートを着込んだ男性が道の隅にうずくまっているようだ。

「あの人……どうしたんでしょう」

「ん、ましろちゃん、ちょっと待つてね」

体調不良やアルコールの飲みすぎだつたら助けなきやなんだけどいかんせんああいう手合いは警戒が必要である。
なぜなら……

「どうかしましたか」

「ちょっと気分が悪くて……ああ暑い、ちょっとこれ脱ぎます」

「きやあああ!?」

そういうつてロングコートを脱ぎ捨てた男性は……
下半身になにも身に着けていなかつた。

それをみたましろちゃんは悲鳴を上げてしまう。

「ぐへへ、これ、どうです？ ホレホレ」

「こういう奴がいるからなんだよなあ……

「……」

「お、おい！ お前もなんか言えよ!!」

「……早くその汚くて貧相なしめじをしまつてください」

「し、しめじだとお!?」

私は汚物を見る目でそう言い放つた。いや実際に汚物ですけどさ。

なんでお前TINTINをBINBINにしてんだよ・・・

「じょ、女子高生なら女子高生らしくそつちの子みたいに悲鳴でも上げろ！」

「だつてえ、悲鳴を上げるほどのものじゃないもん。あ、ましろちやん、目が腐るからこれ以上見ちゃダメよ、両手で目を覆つてね〜」

「は、はい」

しかし暖かくなってきたせいかやっぱ出るよな〜こういう奴露出狂はもはや春の風物詩である。

「バカにしやがつてええええ！」

「危ないッ！」

危ないのはお主のTINTINだけどな！

「ぬ〜きぎああああああああ」

反射的に防御力0のソコに蹴りを入れてしまつた。

突然襲つてきたから全然手加減できなかつた・・・潰れてないといいなあ・・・

とりあえず悶え苦しむそいつを縛り上げ、私は警察に電話したのであつた。

※

未成年ということもあり事情聴取は明日に持ち越しになり、男は警察に連れていかれた。

「本当に申し訳ございません、お子さんを危険な目に・・・」
「何をおっしゃいますか、ましろのこと守つていただいてありがとうございます」

「ございます」

ましろちゃんは、「両親が迎えに来てくれてた。

「でもさつきのアリスさん、カツコよかつたです。変態相手にも全然物怖じせずに立ち向かって・・・」

「ましろちゃん守らなきやつて必死だつたからね」

まあ実際はそんなことはないのだが、ここはそういうことにしておいた方がよいでしょう。

「じゃあ私はこれにて。またごはん食べようね」「はい！」

慌ただしい日であつた。

きっと私はこうやつてこの世界で生きていくのだろう。しかしこの世界は今までちと違うような気もするにで、これは色々と調べてみる必要がありそうだ。

さて、帰つて寝て明日に備えようかな。願わくば常に平和であらんことを。

おはよう、私の愛す世界よ。

第6話 風紀委員のあの子といつものワタシ——前編

|

「おいつすゞ」

「あ、アリスさん。お疲れ様です」

「やつほー、あーちゃん。あれ、紗夜ちゃんはまだ来てないの？」

放課後の生徒会室。留守を預かっているのは市ヶ谷有咲ことあーちゃんであつた。

「ええ。もうすぐ来ると想いますけど・・・アリスさんはあの件ですか？」

「うん。特定できたからその結果報告にね」

ご存知、私は生徒会の依頼で探偵の真似事をしている。

今回は度々敷地内の目立たないところに落ちているタバコの吸い殻の調査であつた。

うちの生徒がタバコをやつてているのであれば問題だし、教員がやつているのであればマナー違反だし、第三者が侵入してきているとしたら大問題だ。

「じゃあ紗夜ちゃんを待たせてもらおうかなー」

「わかりました」

「・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・あれ？」

「どうしたのあーちゃん？」

少々の沈黙。それを破つたのはあーちゃんだつた。

「え、いや。いつもだつたら何振り構わぬ抱き着いてきたり胸揉んで

きたりしてくるのに今日のアリスさんおとなしいなって……」

「えへ？ 私がいつでもそんなことしているわけじゃないよ’でもそういうことなら……」

「え……あの、アリスさん。何ですかその何かを驚掴みにする手の形は」

「覚悟お！」

「やめなさい!!!」

ゴスツ！

「ぬぐおおおおお……」

リクエストにお応えしてあーちゃんにセクハラをしようとしたらと
ころで頭に衝撃が下る。

そこには分厚い生徒会報をタテの持つ紗夜ちゃんがいた。

「ちよつと紗夜ちゃん!! 目ん玉が飛び出たらどうしてくれんのさ!?」

「人体はそんなにたやすく目玉を分離してくれないから安心してください。それになんですか……人が部屋に入るや否やまたふざけて!!」「あーはいはいごめんちゃい。超反省してまーす（反省しているとは言つて いない）

「カツコの中身が見えてますよ!!」

「わあ、メタ発言だあ」

うんうん、いつも通りだ。やっぱり生徒会室はこうでないと。

「さて紗夜ちゃんも来たことだし。本題かな。りんりんちゃんもでて

おいで~」

「え!? 燐子先輩いたんですか!??」

「す、すみません・・・出るタイミングがわからなくて・・・」

奥の方からりんりんちゃんが出てきた。あーちゃんはいると思つていなかつたらしくびっくりしている。

「えつとね。全部特定できたよ～これが吸つてゐる時の動画、これが吸つてゐる生徒の情報、これが生徒の交友関係と家族関係ね。ファイリングしてあるからみてね」

「相変わらずやべー調査能力・・・」

「はあ～・・・本当に優秀なのになんで・・・」

「さ、さすがです。アリスさん」

「しかしこれだけ揃つていれば・・・」

「うん。あの子たち、タバコを数時間と場所でローテーション組んでるみたいで法則性があつたからすぐに特定できちゃつた。うーん、どうやら他校の人とお付き合いしているみたいだけど、あんまり素行のいい人たちじやあないみたいね」

吸い殻の犯人はこの学校に通うとある女性と2人組だつた。他校に通う男子生徒とお付き合いをしてゐるようだが、その彼氏が所謂DQNと呼ばれる人たち。

うーん、女子高育ちつて世間知らずだからなあ。

悪いことをしてゐる男が新鮮でカツコよく見えちゃうんだよね。

あと趣味とかもオトコに影響されやすい。野球とか好きな女子がいたら十中八九彼氏がいるか元彼の趣味だから野球好きの女の子を狙つてゐる人がいたら覚悟した方が良いぞ☆

「ひとまず調査お疲れ様でした。あとは風紀委員で対応いたします」「りよーかい、じやあ法則性教えるから現行犯になるようお願ひね。私も手伝おつか?」

「そこまでお手を煩わせるわけにはいきませんよ」「そつか。じやあ頑張つてね」

「はい」

まああとは紗夜ちゃんに任せておけばよいだろう。
私の仕事はこれで終わり。さて、帰る致しますか。

「またお仕事あつたら呼んでね〜」

「ありがとうございます」

「お疲れ様です〜」

「ありがとうございました」

生徒会室を出て校門に向かう。

うーん、今日は何しようかなあ。

「あ！アリス先輩！」

「そのハイパー元気な声は香澄ちゃん」

「ここにちは！今帰りですか⁈」

「（ゞ）きげんよう。ええ、今帰りよ」

そこに現れたのは元気いっぱい、ポピパのギター＆ボーカル担当、
戸山香澄ちゃんであつた。

「こんな時間にどうしたの？」

「この後バンド練習なので有咲を迎えて行こうと思いまして！」

「なるほど。あーちゃんとはさつきまで一緒だつたんだけどね。まだ
少し仕事が残つてるみたいよ」

「そうなんですか！まあいつものことなので大丈夫です！」

「香澄ちゃんが迎えに行くとあーちゃんも喜ぶだろうね。表面上は嫌
がつてそうだけど」

「そうなんですよ～有咲つてば可愛いんですよ～」

「わかるわかる！ツンツンしているよう見えて思いやりの塊だから
ね。ついついからかつちやうんだよね」

「アリス先輩わかってるうう今度はぜひ一緒に！」

みなさん、「存知香澄ちゃんはあーちゃんが大好きなので話が弾む。

「なに本人のいないところで不吉な相談してんだよ・・・」

「あ！有咲だ！生徒会の仕事はもういいの？」

「今日はもう上がつていいつてさ。それよりアリスさんまで何やつて
んですか！」

「ごきげんよう、あーちゃん。さつきぶりだね」

「あ、ごきげんよう・・・じゃなくてえ！」

「あはは！有咲楽しそう！」

「何をどう見たらそういう見えるんだあああああ」

いいねエ・・・

あーちゃんは香澄ちゃんの前だと本当に自然体という感じだ。
とても楽しそうでお姉さん嬉しいよ。

「私も帰るからさ。途中まで一緒しよつか」

※

帰り道。あーちゃんと香澄ちゃんはバンド練習のためにライブハウスへ、私は帰路につく。

他愛もない話をし、時々あーちゃんをちょっとイジる。そんな楽しい帰路であったが思わず横槍が入った。

「や～君たち可愛いね～。今からちよつと遊ばない？」

他校の男子生徒だ。なんだよこんちくしょう、人が楽しくお話ししているときに。

あれ？こいつよく見たら・・・

「でね～あーちゃん。この前・・・」

少し困惑するあーちゃんと香澄ちゃんにアイコンタクトで「ガン無視を決め込め」と送り、二人は理解したようでそれを決行する。それに合わせて私も雑談を続ける。

「つて無視してんじゃねーぞ！俺が話しかけてんだ！」

あ～はいはい。わかつたもう。

「すみませ～ん。私たちに言つてるとは思わなくて」

「あ、そうなの？ならしいよ。んで、遊びに行こうよ」

皮肉だ馬鹿野郎。

「ん～この子たちは本当に用事あるんで私だけでお付き合いするんでそれでいいですか？」

「いいよいよ！マジかよこんな可愛い子！」

喜んでいるところ悪いが付き合うつもりはないんだよね。

「じゃああーちゃん、香澄ちゃん。みんな待ってるだろうし行きなよ

「え、でもアリスさん・・・」

「大丈夫大丈夫！安心して？」

不安そうなあーちゃんと香澄ちゃんの背中を見送る。さて、どうしてくれようかな～

「で、どこ行くよ？カラオケでもいつちやう？」

「いいですね～ぜひ彼女も呼びましょ～よ」

「え？俺、彼女なんていないよ……？」

「ふくん」

そう、こいつは例の調査で上がったタバコ犯人の彼氏なのだ。

「彼女とおんなじ学校の生徒に手を出すところな」とないですよ今なら何もなかつたことにしますから退いてもらえるといいんですけど」

「この子あいつのこと知ってるな……バラされたらさすがに……しうがねえ……」

無理だとわかるや否やそのまま立ち去ってしまった。

「人の時間奪つたんだから一言くらい謝つてくれてもいいと思うんだけどなあ」

まあああいう人に言つても仕方ないか。

私はあーちゃんに無事である旨のメッセージを送り、普通に帰宅したのであつた。

※

「紗夜ちゃん、ごきげんよう」

「アリスさん、ここにちは。先日はありがとうございました」

3日後、帰ろうとしたところで紗夜ちゃんに会つた。

「あれからどう？調子は」

「ええ。無事に現行犯で捕まえて先生に報告しました。どうやら件の生徒は停学になつてしまつようなのですが……」

「ルールを破るっていうのはそういうことだよ。そのリスク込でルー

ルを破つたんだから因果応報。紗夜ちゃんが気にしてることはないよ」「本人たちも反省しているようです。今日もこの後、そのうちの一人が停学になる前に私に謝つておきたいというのでこれから向かうところです」

「なるほど」

なるほど・・・ねえ

「では待ち合わせがありますので私はこれで」「うん、じゃあね」

そういうて学校を出る紗夜ちゃん。
私は同じ方向に歩き出したのであつた。

第6話 風紀委員のあの子といつものワタシ——後編

|

「あ、来た来た！」

「お待たせしました。しかしました人気のない場所ですね」

「来たよ、やつちやつて！」

「なんですか？？」

あとをつけて正解。紗夜ちゃんが呼び出されたのはとある廃工場跡。

人に謝るのにこんな所に呼び出す意味が分からぬしそもそもそんな殊勝な心掛けをしているとは思えなかつたのだ。

件の生徒のうち1人とその後ろから現れた彼氏の姿を見て紗夜ちゃんは流石に動搖しているようだ。

「バツカみたい。こんなところに本当に一人で来るなんて

「それはあなた達が謝りたいって言うから……」

「そんな訳ないじやんｗｗｗあんたのせいで停学に……絶対に許さない！」

ニヤニヤしながら前へ前へと進む彼氏。

これがほんとの前へススメ？やかましいわ。ポピパに謝らんかい。
え？わたし？知らんがな。

「やつぱりそんなこつたるうと思つた」

「アリスさん！」

「やつほ、紗夜ちゃん」

「あ！お前は!?」

「（き）きげんよう。お久しぶりですね」

彼氏と再会の挨拶を交わす。まあ向こうは威嚇しまくつてくるけど。

「知ってるの？」

「いや知らない」

「え、この前ナンパしてくれたのにもう忘れちゃったんですか？」

「ナンパ!? アリスお姉さまを!？」

あ、こんな状況でも私のことお姉さまって呼んでくれるのね。

女生徒は彼氏をギロリと睨み付けるが、取り敢えず誤魔化すのに成功したようだ。

「それで、何で女のケンカに男が介入してるんですか？ 本当に情けないですね」

「んだと!? おい、アイツもやつちやつていいのか？」

どうやらボロが出る前に私を黙らせたいようである。

「え!? アリスお姉さまを！？ ええと……アリスお姉さまに恨みはありませんから、ここは黙つて立ち去ってくれませんか？」

「そんな虫のいい話あるわけなくてよ？ 見てしまつたものは対処するしかないわ」

「そつか……うーん……それなら……見られちやつたなら仕方

ないわ」

「よつしや！」

彼氏が駆け寄つてくる。開き直つたのか女子生徒はニヤニヤと見守っている。そして紗夜ちゃんは驚愕した顔でこちらを心配している。

「この前の仕返しだ!!」

「あらかた恥ずかしい動画でも撮るつもりだつたんですか？ほんと、こういう悪人つて芸がないですね」

「な?! ぐー」おおおおおおお

勢いよく飛び込んできたので思いつきり胸倉を掴み、宙を浮かせて
みる。

は、はなせえええ・・・「

「あらやだ。放すわけないじやないですか」

く ケソ・・・うおおおお

【お返しします】
「痛いし重たいのもういいです

脚でゲシゲシ蹴つてくるからね、スカートが汚れちゃうしね。
私はソレを持ったまま壁に歩み寄り・・・

そこに向かつて思いつきりぶん投げたのであつた。

らく動けないだろうね。

「さてと。邪魔者はいなくなつたことだし女のケンカ、はじめる？」

「アリスさん・・・？」

あららびつくりしてゐる。でもしようがないよね。これしか方法なかつたもん。

「貴女が停学になつたのは貴女がルールを破つたから。紗夜ちゃんはルールに則つた行動をしただけ。なのに仕返しとかお門違いもいい所じやないかしら？」

「そんなもん大人が決めた勝手なルールじゃないですか！私は自分の意思でやつてるんだから!!」

「ええそうよ。これは大人が決めたルール。でもね、少なくとも長い歴史の元制定された法律として施行されているし学校も法を遵守しなければならない。それにね、自分の意思って言つてるけどそれこそ貴女が決めた勝手なルールよね？そこには何も根拠がない、ただのワガママ。子供が癪癪起こしてるだけ。抗いたいのなら世の中のルールに則った上で抗いなさい」

「くつ・・・」

火の玉ストレートのド正論をぶん投げてみると図星で言葉が出ないようだ。

所詮、暴力に訴える人たちなんてこんなものね。

「なぜ紗夜ちゃんなの？仕返しするならそれこそ学校。紗夜ちゃんは学校のルールに則り動いたに過ぎない。停学の判断をしたのも学校よ？」

「で、でもそいつが私のことを突き出さなければ・・・」

「それは違う。貴女は弱いものを狙つただけ。都合よく憂さ晴らしを出来る対象を狙いややすい紗夜ちゃんにして自分勝手なコトを起こしているだけ。何なら今からその彼氏と学校に乗り込んでみなさいな。貴女の理屈で言うならそれくらい出来るでしょう？」

「そ、それは・・・」

これ以上は言葉が出ないみたいだ。

「さて、紗夜ちゃんどうする？これはもう校則で解決できる範疇を超えていると思うけど。まだ紗夜ちゃん次第ではまだ後戻りできるかもしれないわ」

「そうですね・・・ひとつ聞きます。今の話を聞いてどう思いましたか？」

展開についていけないのか紗夜ちゃんが多少あたふたしつつ、冷静になつた紗夜ちゃんはそう問うた。

「・・・私が間違つてました。本当にごめんなさい」

「よろしい。道を外れても己の過ちに気付きただす勇気を持つのは素晴らしいことです。今回のこと、私は明らかにするつもりはあります。ただし、学校が公式に下した処分は受けてください」

「あ、ありがとうございます!!」

うんうん。これにて一件落着だ。

「オイオイオイオイオイ。なーに勝手に終わらせようとしてんだ！ああん！」

「あらら。結構思いつきりやつたのにもう立ち上がるなんて」

ぶんなげてダウンをとつていた彼氏の方が動けるようになつたようだ。思いのほか頑丈だったのね。

「もう容赦しねえ。マジで殺す。女だつて関係ねえ」

「ナンパに失敗した相手にぶん投げられてブチ切れてそんなおもちゃを出すなんて物凄くかつこ悪いわよ」

「うるせえ!!」

そう、彼氏が手に持つのはナイフ。高校生が持つていいものではなかつた。

「アリスさん！逃げましょう!! 危険です!!」

「そうねえ・・・危険は危険なんだけどあのまま放つておく訳にもいかないでしょ？」

あの手の奴はしつこいし、一度清算しないと終わらないだろう。

それに逆上してまた紗夜ちゃん単独を狙われたそのほうが危ないもんね。

「ちょっと！もういいの！」

「うるせえ！彼女だと邪魔すんならテメエからぶつ殺すぞ！」

彼女もそういうがダメみたい。うん、完全に冷静さを失っている。確かにこのままここに残るのは危険かもしれない。・・・素人の二人は、だけどね。

「紗夜ちゃん、彼女を連れてお逃げなさいな」

「しかしアリスさん！」

「我に秘策ありつてね。大丈夫だから」

「しかし！」

「・・・二度は言わないわよ」

「・・・!?

威圧の気配を感じ取つたのだろう。紗夜ちゃんは一転して素直になる。

「わかりました。くれぐれも気を付けてください!!」

紗夜ちゃんと女生徒が立ち去るのを確認すると彼氏の方に向き直る。

「さて。あなた随分いいオモチャを持つてるけど、人に向けるのは初めてね？」

「なんでそんなことが分かるんだよ!?」

「見れば分かるわ」

だつてホラ、私つていろんな経験してるじゃない？軍にいた頃はあ

んな高校生が持つオモチャなんかじやなくて本場のサバイバルナイフでのナイフ術もあらかた習得してしナイフ戦だつて上位成績だつたのだ。

私が
からしたらあんな才モチヤ、もはやスプーンみたいなものであ
る。

それにあの構え方に及び腰。威嚇で出したは良いが人に向けた事なんかないし引っ込みがつかないっていうのが正直な所だろう。

「それを捨てれば今なら見逃してあげない」ともないけど……どうする？」

完全に冷静さを失っている。あんなスキだらけで突進してきいたら押さえつけて制圧して下さいといつてはいるようなものだ。

「警告はしたよ」「なつ!?

1. ナイフを持つ腕を取る
2. ナイフを持つ手からナイフを捻り落す
3. 落ちたナイフを拾う
4. 動けない姿勢にして首元にナイフを突きつける。

以上、一連の流れ。素人高校生にやるなんぞ赤ん坊にやるようなものである。

「ナイフってのはね、こう言う風に使うんだよ」

ひ、
ひいい
い
い
い
い
い
い
い
い
！？

私はナイフを皮膚が切れない程度にあてて切り裂くふりをした。本当に切るつもりなんてないし力加減をしている。

「アリスさん!! それ以上はいけません!!」「あう妙友ちゃん? 逃げどんジやなかつ

「あら紗夜ちゃん？逃げたんじやなかつたのかな？」

紗夜ちゃんの声と同時に彼氏の方は気絶したようだ。これくらいでバテるなんて情けないわね。

「本当にやるわけないじやいのさ。こんなアホのために殺人者になりたくないしね」

「アリスさん・・・？」

おおつとちよつと雰囲気が怖いな。いけないいけない。

「それで紗夜ちゃん？どうして戻ってきたのかな??」

「それは・・・やはりアリスさんが心配になつて・・・」

「そつか。でも危ないから今度からはやめてね？」

私はそういういつつ伸びたアホ彼氏に往復ビンタを何発か打ち込み、ムリヤリ目を覚まさせる。そして紗夜ちゃん聞こえないようこう言い聞かせるのであつた。

「おい小僧。これ以上私や私の周りをウロチヨロするな。次お前の姿を見たら・・・」

「あ・・・あ・・・・」

「殺すぞ」

「うわあああああああごめんなさあああい」

そんなクツソ情けない声を出して彼氏は全力疾走で消えていった。

「帰ろつか、紗夜ちゃん」

※

「聞いてもいいですか？」

「いいけど答えられないことの方が多いかも」

帰り道、紗夜ちゃんに訊ねられた。

「アリスさん……あなたは何者なんですか？」

「何の変哲もない、ただの志賀有栖だよ」

「……答える気はないようですね」

「答えてるよ。私はただの志賀有栖。それ以上でもそれ以下でもないよ」

「……ふう。わかりました。今日は助けられました。ありがとうございます」

「いえいえ。友達を助けるのは当然のことよ」

その後しばらく沈黙して歩き続ける。

「色々思うことはあるかもしないけどさ」

その沈黙を先に破つたのは私だ。

「私は紗夜ちゃんの味方だから」

「……ふふっ」

「あ一笑つたな～？」

「すみません。そうですよね、今日見てしまったものは衝撃的でした
が……アリスさんはアリスさんですね」

紗夜ちゃんは吹つ切れたように笑いながらそういった。

「納得したの？」

「……してませんけど冷静に考えたらアリスさんが意味不明なのはいつものことだなど」

「ひ、ひどい～～～～～ま、でもありがと。明日からもいつも通りでいてくれると嬉しいな」

「ええ、わかりました」

私は私だ。この世界における役割があるのか、ないのかもわからな
い。

培つた力をこうやつて友達を守るために使うのもいいことだろう。
なんかトラブル続きな気がするけど、願わくばもつともつと常に平
和であらんことを。

え？だから手遅れだつて？知らんがな。
おはよう、私の愛す世界よ。

第7話 白鷺千聖の場合

「新しいマネージャーですか？」

「新サブマネージャーの瀬長 瑞衣（せおさ るい）と申します。以後お見知りおきを」

パスパレのマネージャー体系はグループを総括するメインマネージャー、さらに各メンバーを担当するサブマネージャー、計2人のマネージャーが調整役として動いている組織なのである。

そんな中、私・白鷺千聖のサブマネージャーが産休に入ることになり、代わりにやつてきたのがこの瀬長マネージャーということだ。こうして新たな顔ぶれで芸能生活がスタートしたのである。

「瀬長さん、どこかでお会いしたことないですか？」

「いえ？私は活躍を存じておりますが実際にお会いするのは初めてだと思います」

なんだろう。こう瀬長さんは謎の親近感がある。話を聞くところによると事務所のスポンサー企業からの紹介で入社したらしく、かなりやり手だとか。

少しのやり取りで過去にもあつているかのような親近感をマネジメント相手に持たせるのは、やはり敏腕どいつたところなんだろうか。

実際彼女はやり手だつた。スケジュールの調整、先方との調整どれをとっても完璧にこなし、徹底的に無駄を省いてくれたおかげで私の活動にも余裕が出てきたのである。

「今日は白鷺さん、本日はお疲れ様でした」

「瀬長さんも、いつもありがとうございます」

「いえいえ、お礼を言うのはこちらの方ですよ。白鷺さんみたいなすごい人を担当させてもらつて身が引き締まります」

「それは褒めすぎですよ」

「このあとは直ぐ帰られますか？」

「いえ、実はメインマネージャーに呼ばれていて」

「あ、そうなんですか。わかりました…あ、そういうばこれよろしかつたら」

「これは？」

「白鷺さんが前に気になるけど売り切れで買えなかつたつて言つてた本です。たまたま売っていたのでもしまだ買つていなければ…」「ありがとうございます、ちょうど今日も帰りに探しに行こうかと思つていたんです」

本が買えないなら電子書籍でいいのでは?という声があるのは理解できる。

でもやはり紙媒体には紙媒体の良さがあり、私はなかなかデジタルに移行できないのだ。デジタルだとブルーライトだったり、持つている感覚が違つたりということがあるのである。

「私はもう読んだのでまた感想を言い合いましょうね」

「ありがとうございます!あ、本代…」

「大丈夫ですよ、役作りの資料購入費つてことで経費で落としてあります」

こういうところは流石だ。いたずらっぽく笑う彼女を見て、私はありがたくその厚意に甘ることにした。

「では、私はこれで」

「ええ、帰りもお気を付けて」

※

「接待ですか?」

瀬長さんと別れてメインマネージャーの話を聞くと、直接このような相談があつた。

「ええ。実はとある有名プロデューサーが白鷺さんの活躍を目にして
ぜひお会いしたいと申しているんです。向こうからの申し出ですが
実質接待みたいな形になってしまいますし、相手が相手なので重要案
件としてサブマネを通さず私が動いているわけですが…スケジュー
ル大丈夫でしょうか？」

これは責任重大である。

私は今後のパスパレや私のキャリアになるならと二つ返事でOK
した。

「キミが白鷺さんね。うん、実物の方が可愛いな」

「ありがとうございます」

「うんうん、実にフレッシュでいい感じだ。もうちょっと…こつち
に来なさい」

私は戸惑った。相手が指定しているところはプロデューサーのす
ぐ横だつたからだ。

嫌な予感がする。まさかこれは…

「白鷺さん、何をしているんですか」

メインマネージャーにどうにかしてくれとアイコンタクトを送る
と、メインマネージャーはプロデューサーの言う通りにしろ言わんば
かりにそう言い放つた。

「まさかこれは…・枕営業ですか」

「え？いやいや、人聞きが悪いなあ」

「白鷺さん！これは我が事務所やパスパレにとつても重要な案件なん
ですよ？早く言う通りにしてください」

やられた。

メインマネージャーはプロデューサーとグルなんだ。

初めから私にこうさせるつもりでこの場を設けたんだ。

「ふーん、抵抗するんだ」

「オイ白鷺、テメエお高く止まつてんじやねえぞコラ。アイドルなんて体の一や二つ売つてナンボだろ」

そういうしているうちにメインマネージャーの口調が豹変した。
その口調は明らかに一般人ではない。

「おい、そろそろいいぞ」「え・・・?」

メインマネージャーの合図で入つてきたのは数名の人たち。
そこには撮影に使うようなカメラを抱えた人もいる。

「さつき枕営業かつて聞いただろ? 答えはノーだ。テメーはリニューアルして女優デビューすんだよ。セクシー女優つてんだけどよ」
!?!?

私は血の気が引いた。現状をみると私は個室に一人、相手はプロデューサー(?)、メインマネージャー、カメラマン2人
逃げられる状況ではない。

「まあ諦めてくれや。定期的にアイドルを間引きしてな、こうやつてビデオ撮らせてもらうんだよ。ただ今のままだと未成年だから売りに出せない。まあでもこれを使って被写体をコントロールすることはできる。んで18になつたら元アイドルの女優としてデビューさせんのさ」

「・・・なぜ私なんですか」

「そこ」にいるプロデューサーいんだろ？そちらの方は志賀組っていうヤクザのお偉いさんでな。その方が気に入つた娘とやるためにこの場を設けてんだよ。それが今回お前だつたつてだけの話しさ」

「ま、そういうことだ。子役の頃から見てるけど男の影ないし枕した形跡もなかつたから処女だろキミ。そういう子を犯すのが私の趣味なのだよ」

「うへ～相変わらずロリコン外道すね～」

「所属アイドル売り飛ばして荒稼ぎしてるおめえに言われたくなねえなあ」

「はっはっはっはっはっはっは～!!」

逃げなきや。でもなんで？体が硬直して、足が思うように動けない。

「あらら、腰を抜かしてしまつたようだ。仕方ない、私からそちらに行くか。オイ！カメラ構えろ！私の大事なコレクションだからな、しつかり撮れよ！」

「ああ・・・ああああああ・・・」

「や一つとこの日が来た。長かつたなあ」

下半身を露出しながら近づいてくるプロデューサー（？）が迫ろうとした瞬間。ドアが開き、そんな声が聞こえた。

「せ、瀬長さん・・・？」

なんで彼女がここに・・・もしかして、彼女もグルだつたの・・・？

？

「い、今まで私に見せてきた姿は嘘だつたんですか・・・!?優しくしてくれたのはこの日のためだつたんですか・・・!?」

「ん・・・あ～そういうことか。ごめんごめん。勘違いさせちゃつた

ね。大丈夫、私は味方だよ

「え・・・・・?」

この声はいつもの瀬長さんじやない。・・・・・この声は?
私の知っている声。なんで・・・?なんで貴女がここに・・・?

「貴女・・・そんな・・・!?

「おい瀬長ア! テメー・・・なんでここにいる!?

メインマネージャーが瀬長さん(?)に向かつてそう叫ぶ。

「この現場を押さえるためですよ。そして親友を守るためかな」

「んだと!?

「ち一ちゃん、すぐ済ますからさ。怖いだろうけどちょっとだけ待つ
ててよ」

そこにいたのはサブマネージャーの瀬長瑠衣ではなく、私がよく知
る親友・志賀有栖の姿だったのだ。

第7話 濱長瑠衣の場合

「やあ千耶ちゃん」

「お姉ちゃん、急に呼び出してごめんね」

ある日、私はかつての妹であり関東最大の広域指定暴力団 志賀組のトップ・志賀千耶（しかちや）に呼び出されていた。

「お、お嬢……！」

「あ～もう男泣きしないでよ、暑苦しい。でも久しぶりね、神谷」

横にいるのは志賀組の若頭（N.O.2）の神谷省吾（かみやせいご）である。

「部屋住だつた神谷がカシラとはね～時代が進んだわけだ」

「本当に有栖お嬢なんですよね……幽霊とかじや」

「まあ幽霊つちやあ幽霊みたいなもんかなあ。その反応をしてくれるつてことは千耶ちゃんから話を聞いて信じてくれたつてことでいいのかな？」

「はい。半信半疑でしたが姐さんがそんな冗談言うわけないしと思ってきてみたら……」

「信じてくれたつてわけね。

「お、お嬢……！」

「だから暑苦しいっての」

神谷は私が志賀組の娘をやっていた時にわりと私がお気に入りだった。

そんな神谷がカシラになつて千耶ちゃんのサポートをしてくれているのは心強い。

「さて、感動の再会を済ませたところで本題に入つていいかな」

「うん」

「すいやせん、姐さん」

「切り替え早ツ」

その合図とともに神谷は空気を切り替えた。

「神谷、お願ひ」

「はい。最近、ウチのシマの中で未成年の女性が被害に遭う犯罪が増えてまして」

「具体的には?」

「芸能関係の子が多いみたいで。そこの名の知れた現役アイドルから地下アイドルまで被害者は多岐にわたるようですが、共通しているのはAV女優になつてゐみたいですね。仕入れた情報によると未成年のうちにツバをつけておいて18になつた瞬間、元アイドルの肩書を使つて売り出しているみたいです」

神谷が持つてきた資料を見るとなるほど、確かにこれは……

「これが本当だとしたら夢見て頑張つている女の子を食い物にするクソ野郎なんでしょうけど組が動いているつてことはシマ荒らされているとかそんな感じかな?カシラが直々に動くつてよほどのことだし」

「イメージはそうなんですが、ただここは事情が複雑でして……シマがあらせているというよりは……」

「……もしかしてルール違反?」

「さすがです、お嬢」

組内かあく

そういうえば志賀組は代々の方針で18以下の未成年には手を出し
ちゃダメつて決まつてたしなあ

「なるほどねえ・・・被害者はどこで調達してるの?」

「それで仮にそれを行つてゐる奴をXとしましよう。そいつが芸能事務所に勤めている協力者を使つてゐるようでして」

そう言つて神谷が出した資料に書かれている芸能事務所名をみて私は目を見開いた。

「私を呼んだ理由がこれってことね」

「そうです」

「神谷、ここからが私が説明する」

「わかりました、姐さん」

解説役が交代し千聖ちゃんに移る。

「パスパレか・・・」

「そう。こちらで仕入れた情報によるところのメインマネージャーがネズミね。そして次のターゲットは・・・白鷺千聖さん」

「どうやつて情報を仕入れたかはまあ聞かないでおくけど・・・なるほど」

多分とても効率的な方法(周辺の奴を拷○したり○問したり)したんだろうけどとりあえずそれはどうでもいい。

でもそうか・・・

「だからお姉ちゃんは彼女を気にかけての周りで何か起きそうだったら知らせてほしいの。ちょうど彼女のサブマネージャーが産休に入るみたいだから組の関連会社から誰かを潜入させて・・・」

「私がやるよ」

「え?」

「私が、やる」

「でもお姉ちゃん・・・」

「三度目を言わせるつもり?」

「!?」

「なんて威圧感だ……！」

千耶ちゃんも神谷も驚いている。

「でもお嬢、現実問題どうやるんです？お嬢はメンバーにツラ割れてるわけですし第一お嬢もこの世界では18。未成年じゃないですか」「組で身分だけ用意してくれる？そうだね、偽造免許と偽の経歴……あとは関連会社の方の社員資格かな。3日後、もう一回話そう」

私は正直ブチ切れていた。

またしても私の平穏と大事な友達を脅かす奴が現れたのだ。
女優業を愛し、アイドル業を愛し、仲間を足夢を突き進む彼女を絶対に餌食などには絶対にさせない。

その日の話し合いはそれで終わり、私は準備に取り掛かった。

※

「ここにちは、志賀有栖さんの紹介で参りました瀬長瑠衣です」「はじめまして。なるほど、お嬢の紹介ですか」

「見るからにやり手ね。それで、お姉ちゃん……有栖さんはどこへ？」

「……いますよ、目の前に」

「え……？」

「どこかしら……」

私は声を戻してもう一度いう。

「ここにちは、志賀有栖とイコールの存在・瀬長瑠衣です」

「え……？」

「ええええええ!?」

「神谷、声がデカいわ」

「す、すいません・・・って違うでしょ!」

「ノリがいいのは昔と変わらないのね」

「本当にお姉ちゃんなの・・・?」

「だからそう言つてるじやない」

数多の世界を歩く中で私は諜報員をやつていたこともあるので、その時に培つた変装スキルと演技を発揮した次第だ。

そのことを話すと二人はめちゃくちゃ驚いていた。

「お、お姉ちゃん。やつぱりウチに来ない?」

「もう、それは断つたでしょ。それで、本題」

「あ、はい」

「私がこの姿で潜入するわ。学友としてちーちゃんの行動を把握してサポートするのは限界があるし・・・潜入なら最も近くにいられるし、メインマネージャーの動きも把握できる。そのうち黒幕の正体が分かれば一石二鳥よ」

そう、これは私がすべて直接動くことで一気にやつてしまおうという筋的な思考である。

「もちろん、血なまぐさいのはイヤだから黒幕とメインマネージャーの“処理”は本業のあなた達に任せていいいのよね?」

「それはいいですがお嬢人一人じゃ危険では・・・?」

「そうね・・・相手は極道との息がかかったチンピラ。逆上されたり潜入がばれて襲われでもしたら・・・」

あ、その心配か。

「ねえ神谷。ちょっと腕試しをしましよう。実力を確認できればいいでしょ?」

「でもお嬢・・・」

「ええから。かかつてきなさい」

「・・・!?」

流石本職。私の出した殺氣を感じ取ったみたいだ。

「いいんですね？」

「ええ

「お姉ちゃん、神谷はゴリゴリの武闘派でもあるのよ。本当に大丈夫？」

「みてればわかるわ」「いきますよ!!!!つてなつ!?!?！」

動く神谷、捕らえてぶん投げる私。以上。

投げ飛ばされてわけのわからなくなっている神谷と驚く千耶ちゃん。

「えっ!?いやいやもう一度!・・・ゴフッ!!!」

次は強烈な拳を神谷の体に一撃。そして即座に神谷は両手を上げた。

「ゴホツゴホツ・・・こりや敵いませんわ。多分、続けたら俺死にます」
「・・・そのようね」

「決まりね」

こうして私は志賀組の関連会社からの出向という形でパスパレの運営事務所に潜入することになった。

サブマネージャー・瀬長瑠衣。これがこれからの私の肩書だ。

ちなみに瀬長瑠衣は私が諜報員時代に使つてた偽名の一つで「しかありす」の名字を一音ずつ下げ、名前を上げて並び替えただけの捻りのない由来である。

「さお いるせ」→「せおさ るい」

「しかしお嬢、血なまぐさいのイヤつていつてますけど 一体どんな修羅場潜り抜けてきたんですか・・・ウソですかん」

「あら? 血なまぐさいのはイヤと入つたけどダメとは言つてないわ?」

「あ、はい」

さて、ミッション開始ね。

私はその後、変装をして作られた身分で潜入し、瀬長瑠衣としてちーちゃんのマネージャーになつたのであつた。

第7話 志賀有栖の場合

「新サブマネージャーの瀬長 瑠衣（せおさ るい）と申します。以後お見知りおきを」

無事に事務所へ潜入した。軽く挨拶を済ませたがちーちゃんも私の変装を見破れないようだ。

「瀬長さん、どこかでお会いしたことないですか？」

「いえ？私は活躍を存じておりますが実際にお会いするのは初めてだと思います」

「ファツ！一瞬バレたかと思つて冷や汗モノだよ。
流石はプロ、鋭い。なんとかごまかしたけど。

その後は別の世界（以下略）でマネージャー業務を全うした。

「瀬長さん、白鷺さんはどうですか？」

「やはりすごいですね。仕事に無駄がなく方々からの評判もいいです」

「それはなにより」

事務作業中に話しかけて来たのはメインマネージャーだ。
千耶ちゃんや神谷が言うところのネズミである。

「それは・・・白鷺さんのスケジュールかな？」

「ええ。色々と予定が立つてきたので作成しているところです」

「なるほど。そうだな、僕にも後で見せてくれるかな」

「どうしてですか？」

「いや深い意味はないよ。所属タレントのスケジュールくらいメインマネージャーが把握しているのもおかしくないでしょ」

「確かに」

ここで抵抗すると怪しまれるな・・・仕方ない

「承知しました。完成しましたらお送りいたします」

「ありがとうございます」

それだけ話してメインマネージャーは帰宅していく。

「そろそろかな」

昼は学友として、放課後はマネージャーとしてちーちゃんと接する二重生活も終わりが近いかもしないね。

「まあ近くする、が正しいけどね」

私はスケジュールを組み込む中で、明らかに穴のスケジュールを作つておいた。

近いうちに奴らが動くなら、この穴を狙つてくるだろう。

私は完成したスケジュールをメインマネージャーに送り、諸々の準備をするために帰宅したのであった。

※

「今日は白鷺さん、本日はお疲れ様でした」
「瀬長さんも、いつもありがとうございます」

そして私が作つた「穴」当日。

この日は他のメンバーより早く仕事が終わり、帰るには早すぎる時間。

そう仕事が終わるよう調整したのである。

「いえいえ、お礼を言うのはこちらの方ですよ。白鷺さんみたいなすごい人を担当させてもらつて身が引き締まります」

「それは褒めすぎですよ」

「このあとは直ぐ帰られますか？」

さて、どう出るか。

「いえ、実はメインマネージャーに呼ばれていて」

どうやら綺麗に罠にかかりてくれたようである。

「あ、そうなんですか。わかりました…あ、そういうればこれよろしくつたら」

「これは？」

「白鷺さんが前に気になるけど売り切れで買えなかつたつて言つてた本です。たまたま売つていたのでもしまだ買つていなければ…」「ありがとうございます、ちょうど今日も帰りに探しに行こうかと思つていたんです」

そういうつてとある一冊の本を渡す。

ちなみに本に挟んである葉に高感度の集音チップが仕込んである。これで状況をうかがい、奴らが動いたらちーちゃんに危害が及ぶ前に突入して救出。果たして黒幕まで言つてもらえるかどうか…

「私はもう読んだのでまた感想を言い合いましょうね」

「ありがとうございます！あ、本代…‥‥」

「大丈夫ですよ、役作りの資料購入費つてことで経費で落としてあります」

経費（極道のカネ）で買ったのは盗聴器もあるが。

「では、私はこれで」

「ええ、帰りもお気を付けて」

さて・・・

「もしもし神谷？うん、今日動くみたい。ええ、後をつけてみるから
こっちに向かって。場所が分かつたら合流しましょう」

※

場所はある雑居ビル。こんなところに呼び出しちゃって・・・
メインマネージャーの呼び出しだし警戒心がないのも仕方ないと
は思うけど。

私は神谷に所在地を送り。盗聴器を聞く。

——「まあ諦めてくれや。定期的にアイドルを間引きして
な、こうやってビデオ撮らせてもらうんだよ。ただ今のままだと未成
年だから売りに出せない。まあでもこれを使つて被写体をコント
ロールすることはできる。んで18になつたら元アイドルの女優と
してデビューさせんのさ」——

——「・・・なぜ私なんですか」——

「そこにいるプロデューサーいんだろ？そちらの方は志賀組っていう
ヤクザのお偉いさんでな。その方が気に入つた娘とやるためにこの
場を設けてんだよ。それが今回お前だつたつてだけの話しさ」——

——「ま、そういうことだ。子役の頃から見てるけど男の影
ないし枕した形跡もなかつたから処女だろキミ。そういう子を犯す
のが私の趣味なのだよ」

——「うへ～相変わらずロリコン外道すね～」——

——「所属アイドル売り飛ばして荒稼ぎしてるおめえに言わ
れたくなねえなあ」——

「はつはつはつはつはつは!!」

はいビンゴー。志賀組の偉い人つてこれ黒幕確定やん。

なるほど、そういう理由・手口で被害者を呼び出していたのね。

「随分身勝手な理由ね。反吐が出るわ」

私は即座に雑居ビルの階段を駆け上がる。

その間にもことは進み、どうやら黒幕がちーちゃんに近づき始めたみたいだ。

「やーつとこの日が来た。長かつたなあ」

潜入して1か月。長かつたけど意外と早く尻尾を出したというべきか。

もつともネズミの尻尾は長いから最初からみえていたけどね。

「せ、瀬長さん……？」

そりや驚くわね。しかしちーちゃんの恐怖に歪んだ絶望した顔。こんな顔を見せた奴らを許しておくわけにはいかないなあ。

「い、今まで私に見せてきた姿は嘘だつたんですか……!? 優しくしてくれたのはこの日のためだつたんですか……!?’

変態共が迫る→わたし、参上→やつとこの日が来たとかぬかす→このシチュエーションを待つてました→被害者からみいたらグルのクソ野郎

・・・・・これはアカン

「ん……あ、そういうことか。ごめんごめん。勘違いさせちゃったね。大丈夫、私は味方だよ」

あくまで冷静に、優しく語りかける。

瀬長瑠衣の声ではなく、慣れ親しんだ志賀有栖の声でね。

「え・・・・・？貴女・・・・そんな・・・・！？」

「おい瀬長ア！テメー・・・なんでここにいる!?」

「この現場を押さえるためですよ。そして親友を守るためかな」

「んだと!?」

「ち一ちゃん、すぐ済ますからさ。怖いだろうけどちよつとだけ待つててよ」

「アリス・・・・アリスなの？」

さすがプロの女優。姿形は違えど声と雰囲気で正解にたどり着いたようだ。

「ごめんね、ワケあつて黙ることになっちゃって。それにこんな危ない目に遭わせちゃって」

これは心底反省しているところであった。

本来はこの状況になる前にどうにかすべき。しかし今回の場合、極道が絡んでいるためネズミだけを叩いて強行突破するのは根元が断ち切れないため、弊害が出る可能性があつた。

故に言い逃れのできない証拠を押さえ、神谷・千耶ちゃんという本職の元、コトを処理をする必要があつたのだ。

「おいなんだテメエ。邪魔すんなよ」

そう言つてカメラマンが二人私に近づいてきて、肩を掴み凄んでくる。

うーんこいつもカタギじやないね。

「邪魔すんなつてセリフはね、私が言うべきセリフだと思うんですよ」

刹那、私は奴の持つカメラを奪い取り、死なない程度にぶん殴った。女相手でナメてかかっているのか隙だらけで2人とも一撃。

意識を刈り取ることに成功した。

「その身のこなし・・・まさか本家の回し者か・・・？」

「んく正解つちや正解。でも私はカタギよ？今回はちょっと協力しただけ」

「ほ、本家だと？俺のことが本家にバレているのか？」

黒幕と思しき奴がそういう

「バレてているかどうかで言つたらバレてないよ（神谷が到着するまでは）」

「それなら瀬長、テメエの口を塞げば問題なさそうだな」

メインマネージャーが凄んでくる。

しかしこの雰囲気は本職ではないね。本当にただの協力者なんだろう。

「アリス！私はいいから逃げて!!」

「大丈夫だよ」

「でも・・・貴女に何かあつたら・・・！」

「んくこの状況を作つたのがそもそも私だし。ちーちゃんならわかるでしょ？そういうことよ」

「・・・・！」

「耳を塞いで、目を閉じていてくれるかな」

ちーちゃんはとても複雑そうな表情を見るに理解はしたけど・・・といった具合だ。正直、かなりひどいことを言つている自覚はある。

でも仕方ないのだ。ちーちゃんを完全に安全な、日の当たる世界で居続けてもらうためにはこうするしかない。

瀬長瑠衣として潜入すると決めたときには、悪になる覚悟はどうにできているのだから。

「さて、罪状の確認をしましよう。メインマネージャー、あなたは立場を濫用してそこのヤクザと結託してタレントを堕としていた。そしてそつちのヤクザは自らの欲望を満たすためにタレントの女性を蹂躪し、それに飽き足らずAV業界で荒稼ぎをしていた。間違いないないかな？」

「それがなんだってんだ？ ビジネスつてものはよ、誰かの犠牲の元成り立つもんだろ？」

「確かにね。ビジネスは一筋縄ではいかない。誰かが笑う一方で誰かが泣くこともある。でもそれは真っ当なビジネスの場合。あなたのよう非合法で人の心を踏みにじる行為はビジネスとは言わない。ただの外道の犯罪行為よ」

「知った口をきいてるんじゃねえ！」

「こつちは色々知つてんだよ」

私は迫ってきたメインマネージャーの首を真正面から掴み、そのまま持ち上げた。

「ぐ、がががががががががが」

「人一人を持ちあげる力で首を締め上げているんだもん。苦しくて仕方ないでしようね」

「は、はなしでぐれえええええ・・・・・ヤメテ・・・・・ヤメ・・・・」

「あなたが今まで墮とした被害者たちは一回もやめてつて言わなかつたのかな？ でも言つたとしてもやめてないよね。権利ばかり主張しやがつて義務を果たせよコラ」

そしてそのまま壁に顔面を叩きつける。

その後、奴は鼻血を噴き出して意識を失った。

「オイ女。テメエ、タダ者じゃねえな。何モンだ」

「私はカタギだよ。それ以上でもそれ以下でもない。ただの友達想いの女の子」

「んなワケあるかよ。この迫力、いつたいどれだけ修羅場をくぐつてきたら身につくんだ?」

「ご想像にお任せします」

「フン。まあいい。俺はそこの雑魚とは一味違うぞ」

懐からドスを出し、雰囲気を一気に“本職”に変えてきた。
私も構えたのであるが、そこで状況が変わった。

「おう柿本。カタギ相手に結構なモン向けてるじゃねえか」
「神谷のカシラ!?!?」

こいつ、柿本って名前なんだ。

神谷が来たようね。うん、私の仕事はここまでか・・・
できればこいつをぶちのめしたかつたけど、ちーちゃんもいるしこの辺にしておくか。

「つてお嬢・・・あゝもう派手にやつちゃって。血なまぐさいのはイヤ
じやなかつたんですか?」

「だーかーらーイヤだけどダメじゃないって」
「それ屁理屈じやないすか」

「あー!屁理屈つていつた!神谷、あんた何でもかんでも屁理屈で片
付けるオツサンになつてるわよ?」

「誰がオツサンですか!・・・まあいいです。あとは俺でります。そ
の子を連れて逃げてください」
「りよーかい」

耳を塞いで震えていたちーちゃんの元へ向かうべく背を向けたのであつた。

第7話 また、始まる

「ちーちゃん、逃げるよ」

「・・・アリス」

震えるちーちゃんの手を取り、立ち上がらせる。
彼女は少し落ち着いたようでなんとか歩行できるレベルにはなつ
ているようだ。

「ごめんね」

「どうして謝るの・・・?」

「どうしても。詳しいこと、ちゃんと話すから。ひとまずここから離
脱しよう?」

「・・・わかつたわ」

ちーちゃんはしっかりと立ち上がり、私と手をつなぐ。

「神谷! あとは任せるわよ!!」

「はい! 若い衆を下に待機させてるんで、お嬢たちが出ると同時に突
入するように指示してあります!!」

「OK、あとは頼むわ」

これで安心だ。柿本という組員は若頭直々に肅清され、あのメイン
マネージャーもタダでは済まないだろう。

これでちーちゃんを脅かすものはなくなる。安全に日の当たる場
所を歩かせてあげられるんだ。

「逃がすかボケエエエエエ!」

「!?」

「パン!!!!」

突然叫ぶ柿本。

鳴り響く破裂音。

熱くなる肩。

初名は激昂し 桜本を一撃で斬める

セリセちゃんは涙で顔をホロホロにして和の名前を叫ぶ

「やつてくれたなあ」

状況を確認する。

熱々と共に直覺したことで痛みがどんどん増していく。

幸い出血は少ないようだかこりや撃たれた左肩は三分ほども

ちーちゃん そんな顔しなさんな

こういう時つて撃たれてそのまま意識を失つて目を覚まさなく
て・・・

つてのがセオリードとは思うんだけどね。

る。

痛いつちやあ痛いけどね。

「神谷、そつち片付いたならもう若い衆呼んでき、そいつら回収させてよ」

「お嬢、大丈夫なんですか!?すんません、俺がついておきながら……」「大丈夫とは言えないかもだけどお前が考えているほど酷くはないかな。ついでといつちやなんだけど弾丸摘出してくれる病院紹介してくれる?」

所謂、闇医者というやつだ。

病院には暴力団関係者をお得意様にしている闇医者がいる。

志賀組程の巨大組織なら間違いないだろうからそこで秘密裏に摘出をしてもらおうというハラである。

「わかりました、ウチの若いのにつれてかせます。そちらのご友人はどうなさいますか?」

「さすがにちーちゃんを若いのに送らせるのはまずよなあ。芸能人とヤクザつて一番繋がつてちやいけないし。タクシー呼んであげてよ」「わかりました。オイ! 話は聞いてたな!?」「ハイ!!」

若いのが元気よく返事をする。

「悪いですね、お手を煩わせてしまって」

「いえ! 姐さんやカシラからV I Pの方だと聞いておりますので!!」「ありがとう」

若いのに微笑みかけると少し顔を赤くする。
あらやだ、可愛い子。

「じゃあちーちゃん、ごめんだけどここでいつたんお別れ。詳しいことは落ち着いたら話すね。あと多分1週間くらい学校休むと思うけど心配しないでね」

私は返事を聞かずにそのまま病院へ向かった。なんとなくこれ以上話すのが気まずかつたのだ。

別れ際、ちーちゃんはどうしたらいかわからない困惑した表情だった。

※

志賀組に紹介してもらつた病院で弾丸摘出をした私は数日入院することになった。

当たり所が良く神経も傷ついていない、さらに回復威力が高いよう医者には撃たれてこの軽傷なのは奇跡とまで言われた。

本当は入院は煩わしいと思ったが千耶と神谷が安静にしろと譲らなかつたので諦めた。

ちなみに私が撃たれたことにより千耶ちゃんは神谷を処罰するつもりだつたみたいだけど、参加したこと自体私の意思で自己責任だったわけで、それはやめてあげてと申し上げたところ、渋々承諾してくれた。

コンコン

病室のドアをノックする音が聞こえる。

「どうぞ」

「失礼します」

やつてきたのはちーちゃんだ。

今日この日、しっかりと話すということで来てもらつたである。

「ごめんね、こんな格好で」

腕を吊っている私を見てちーちゃんは酷く痛ましい顔をする。
もうそんなに痛くないのに。

「まずはごめんなさい。あの場は慌ただしくてしつかり言えなかつた
から」

「いいのよ・・・アリスが無事なら。傷は・・・？撃たれたときは私が
倒れそうだったわ」

「大丈夫よ、ありがとう」

微妙な空気が流れる中、私は息を吸い込み話を始める。

「あの日のこと。黒幕とメインマネージャーを吊り上げるためにちーちゃんを囮に使う形になつた。でもそれしかなかつた。言い訳になつちやうけど」

実際、あの時メインマネージャーだけを叩いていたら黒幕の柿本はメインマネージャーを切り捨てて違う協力者を作つただけだろうし、そうなるとちーちゃんが危険に晒された状況を改善できず、手つ取り早く黒幕にたどり着くにはこれが最善だつたと今でも言える。

「なんでアリスだつたの・・・？」

「それはね・・・」

志賀組から協力の要請があつたこと。本当は志賀組が別の潜入要員を用意するはずだつたところを私が請け負うことを申し出たこと。

そのあたりを話すと理由が分かつて少し納得したようだ。

「話はわかつた。確かにそういう事情なら私を囮にするのが最善ね。アリスじやなくともそうなつてたから結果は変わらないと思うわ。でも・・・私が聞きたいところの本題はそこじやない。私が全く気付かないハイレベルな変装スキル、あの強さ。そして志賀組との関係。

一体貴女は何者なの？もしかして志賀組の構成員とかなの？」

そらきた。本題だ。

「私は極道じゃない。名前が一緒なのにも理由がある。……これを友達に話すのは初めてだけどさ。多分すごく突拍子もなくて信じられない話だと思う。それでも最後まで聞いてくれるかな？」

「わかつたわ」

私は一つずつ話す。私という存在が何なのか、数多の世界を渡り歩いた経験をそのまま持っていることや、志賀組の面々との関係。

「……というわけ」

「……」

ちーちゃんは黙つて俯いてしまう。

「からかっているの……？」

「そりやそういう反応になるよねえ普通」

まあある意味当然である。

「私は眞面目に話に来ているのに、何よ。意味がわからない……わからないわ！」

「ごめんね。でもこれ以上言いようがない。私にとつてそれは眞実だから」

まっすぐ目を見据えてちーちゃんを見る。

それに対しちーちゃんも私の目をしつかりと見る。

そのまま數十秒、にらめっこ状態が続いたのだが、沈黙を破つたのはちーちゃんだった。

「ごめんなさい」

「え、なして謝るの」

「試させてもらつたの。信じられない話だつたから。でも貴女は翻すこともなく私の目をしっかりと見据えた。・・・突拍子もなくて現実味のない話。でも私は信じる。貴女という人間性や現実に起きたことを加味すると信じるしかないわ」

「そつか。ありがとう」

ようやく、緊張していた雰囲気が和らいだ。

ああ、やっぱりちーちゃんはちーちゃんなんだなあ

「だからといって私たちの関係が変わるわけじゃない。私はいつも通りのただの志賀有栖。それ以上でもそれ以下でもないからね。それでいいかな？ちーちゃん」

「ええ。この身に起きたことはあまりに衝撃的だけど、もう大丈夫」「よかつた。あ、でもこれだけは約束する。私は絶対にちーちゃんの味方だからね。またちーちゃんが危ない目に遭つたり、悪い大人に利用されそうになつた全力で助けるから」

「ありがとう。そういう状況が来ないことを願うわ」

「あはは、確かに！」

その後、私はしばらくちーちゃんと久方振りの雑談を楽しんだ。

「学校への復帰はいつから？」

「来週明けには。ほんとは今すぐにでも退院したいくらいなんだけど」

「やたらタフね・・・じゃあ、私は帰るわね」

「うん。また学校で」

そういつてちーちゃんが退室した。

ふく・・・なんとかなつた。秘密を知る人が増えてしまつたけどそれがちーちゃんでよかつたのかもしれない。

「おーい、神谷。盗み聞きはよくないぞ！」

実はさつきから病室の外に暑苦しい男の気配を感じていたのでそれに向かって声をかける。

「うつうつうつ・・・女の子の友情つていいですね・・・お嬢もよかつたですねえ・・・ううううう」

「あつつくるしいわ！でもま、今回は色々ありがと。おかげで何とかなつたわ」

「なにをおっしゃいますか、お嬢にケガまでさせちゃつて。しかも姐姐に恩赦まで・・・」

「それは私の自己責任だから。で、その後は？」

「柿本は肅清、メインマネージャーは永久契約でゲイ専門の風呂に沈めてやりました。奴らが持つていたAV会社も潰してルートを完全に断ち切りました」

「えげつなつ！まあでもそれくらい当然か！」

結果良し。

というわけで今回の騒動はこれにて落着。

普通に過ごすつもりがやれ芸能界の闇だのやれ極道だのスケールがどんどんでかくなちゃつた。

「おはよう、アリスちゃん。一週間も休んで・・・つてその腕どうしちゃつたの!?」

「おはよう、あやちゃん。いやー階段から落ちちゃつて。受け身とたつらこのざまよ」

「おはよう、アリスちゃん・・・どうしたのそれ!?」

「おはよう、かのちゃん。いやー階段（以下略）」

退院し学校に復帰した。声をかけてくるみんなは腕を吊っているのに驚いているようだ。

「おはよう、アリス」

「おはよう、ちーちゃん」

笑顔のちーちゃん。

それは曇りがなくいつも通りのちーちゃん。

この笑顔を守れただけでも、よかつたと思う。

「教室まで一緒にいきましょう。カバンを持つわ」「うん、ありがと」

さあ、また新しい日常が始まる。いつも変わらない日常が。

でも私は気づいてしまった。多分私は平穀に過ごすためにこの世界に来たのではなく、友達に降りかかる危険から友達を守るために来たんだなって。

それでも私はこの世界が好きだ。というわけでいつもの、やつておこう。

おはよう、私の愛す世界よ。

第8話 こころこねくと

「お食事会の付き添いですか？」

「ええ、実はこころが社長令嬢の食事会に招待されてるんだけどね。こころはいい意味でも悪い意味でも個性的だろう？中には悪意を持つて近づいてくる令嬢もいるかもしれないからね。有栖ちゃんさえよければ付き添いをしてあげられないかい？」

ある日、突然黒服の方々に囲まれたと思つたらある会社の社長室にいた私。

目の前にいる弦巻さんからそんな話をされた。

「主催者のお嬢さんがライバル会社社長の娘さんでいつも断つているんだけどね。しかしあまり無下にもできない。もしかしたら娘に新しい友達もできるかもしないしね」

「いいですよ。私もこころさんが良くない目に遭うのは不本意ですし」

「助かるよ」

「弦巻さんはお世話になつてるのでこんなことによければ。それに実は・・・」

弦巻さんはこの世界での私の父の親友らしい。

父と母が事故で亡くなつた時も相続やその他諸々で助けてくれて、遺産にすり寄つてくる有象無象も対処してくれたようだ。

そのおかげで私は両親の財産を問題なく想像できて、相続税などの問題も弦巻さんがやつてくれた。

私は一人つ子だつたため、一生使いきれない資産と父が経営していた会社の株も父と母の持ち株をすべて相続したため、筆頭株主という立場を手に入れたわけである。

そんなこともあり私はこの人に大きな恩があるわけである。

「実は私のところにも招待が来ていたんで。スルーしようと思つてしま
したけどそういうことなら」

「そういうことか。有栖ちゃんはもステータス的には参加資格は十分
だし頼むよ」

※

「こ、わからなかつたら私がやるし周りがなんて言おうと気にな
なくていいからね」

「何が起きるのかしら？ワクワクするわ!!」

うーん・・・

わかつてねえやこれ。ま、露払いは私がしますか

「今日はお集まりいただきありがとうございます。楽しんでいって
ください」

主催者の令嬢がそういう。

テーブルには5人

主催者令嬢、お仲間の令嬢2人、私、こころちゃんだ。

メンバーの下調べは済んでいる。

お仲間の令嬢はどうやら主催者令嬢の父が経営する会社の役員の
娘たち。

つまり3人は完全に派閥と考えていいだろう。

「ようやく弦巻こころさんと志賀有栖さんにお会いできて光榮です
わ。招待してもなかなか来てくださらないんですけどもの」

「申し訳ありませんわ、色々と忙しくて」

「さすがあの会社の筆頭株主様は違いますわね」

嫌味っぽく言われる。

どうやら友好的な食事会ではないみたいね。

「弦巻さんも、ようやくお会いできましたわね」

「あなたは誰かしら？」

おおう、いきなり爆弾投下してるやん・・・

「弦巻と比べたらわたくしなど名前を覚える価値もないと・・・?
「あら? どうかしたのかしら?? お腹が痛い時の顔してるわよ??」

すげえ! こころちゃん天然で嫌味に迎撃してる・・・そしてクリティカルしてるわ

取り巻きの令嬢も”まあなんて失礼な”つて顔してるし。
しかしこれでは進まないのでここは空気を切り替えよう。

「まあまあ」挨拶はそれくらいにしておいてお食事にしましょう

「コホン、そうですわね」

令嬢は手を上げてスタッフを呼ぶ。

『いつものをいただけるかしら』
『かしこまりました』

※『』会話は外国語で会話していることを表しています。

「あら? どうかなさいました? このお店では英語でオーダーするのが決まりでしてよ?」

「あら、 そのなの? 困ったわ、 あたしは英語が話せないもの」
「まあまあそうですの! 仕方ありませんわね、 ここはわたくしが代わりに『』注文して差し上げますわ!!」

こころちゃんの返しに水を得た魚のように元気になる主催者令嬢。

あ～やつぱそういうことね。

「そうですわね、せっかくなのでお願いしましようか。あ、でもその前に…ご注文するもののメニューを『説明いただけます?もしかしたらアレルギーがあるかもしないので…』

「え?!ええと、その…？」

私はそういう。

「まあ…アレルギーは大変ですわね。私はいつも主催者令嬢さん（仮名）にお任せしていますので…」

「わたくしも…」

取り巻きたちがそういう。

「どうかしたのですか?」

「ええと…」

『ま、ろくに英語も話せないくせにマウントをどうとするからそういうのよ』

「え…？」

私が突然流暢な英語を話し出しだして驚いているようだ。

そもそもこの食事会自体、主催者令嬢が私やこころちゃんにマウントを取るために開催されているもの。

英語を話せない私たちの代わりに華麗に振る舞い、英語を話せないことをバカにしつつマウントをとる。そんな計画のようだ。

ぶつちやけ彼女の英語は発音が怪しいし、なんというか文章を“丸暗記しました”という感じがわかる。つまりところ彼女は簡単なビジネス場面でのあいさつ程度の英語しか話せない。

おそらくレストラン側に事前に話を通しておき、ヘタクソな英語で“いつもの”といえば料理が出る仕組みにしておいたんだろう。

故に彼女はどんな料理が出てくるか知らない、だから私の質問に困惑しているのだ。

さらに言うと私がさつき英語でいつたことも理解できていなかろう。

『え？ わからないのかしら？ はあ、マウントをとるならもつと英語を勉強してからしなさいな。あなた、最高にカッコ悪いわよ』

「え？ え？」

「主催者令嬢（仮名）さん、志賀さんはなんとおつしやつてますの？」

取り巻きが追い打ちをかける。

『あなたに聞いてもラチが明かないわね』

そういってスタッフの方を向き直る。

スタッフは必死に笑いをこらえている様子だった。

『ど、 いうわけで彼女の注文したメニューの解説をしてくれるかしら？』

『かしこまりました。メニューは・・・』

メニューの解説を聞いた。まあ内容はどうでもよかつたので適当に聞き流したわけであるが。

『ありがとうございます。 そうね、ノンアルコールワインはあるかしら？ あいにく未成年だから・・・メインディッシュのステーキにあうものがいいわ』

『でしたらこちらのメニューの・・・これがおススメです』

『いいわね。 彼女たちにも同じものを頼めるかしら？』

『かしこまりました』

「主催者令嬢さん、全員同じものでよろしいでしようか？」

「え!? あ、はい・・・」

『と、いうわけで』 いつもの を全員分と私がさつきいつたワインを
人数分、頼むわね』

ニヤツと笑ったスタッフはオーダーを取り終えて下がっていく。
きっとバックヤードは爆笑の渦になっていることだろう。

「ノンアルコールのワインを勝手に注文してしましましたわ。今日の出会いに感謝して私から皆様にご馳走いたしますわ」

「~~~~~」
「／／／／」
「！！」

余裕たっぷりな感じでそういうと主催者令嬢は顔を真っ赤にして
ブルブル震えていた。

• •
• •
• •
• •
• •

どう反応していいかわからない取り巻きたち。

「まあ！アリスは英語が上手なのね！」

ひとりいつも通りのこころちゃん

やあ
いただがましようか

こうして、運ばれてきた料理たちを前に、食事会をはじました。主催者令嬢は終始おとなしく、平和に平和に終わつたのであつた。

うん、平和だなあ。ごはんは美味しかったし久々にこころちゃんと遊べたしマウント令嬢つていうオモチャでも遊べたしたまにはこう

いう日があるってもいいわね
おはよう、私の愛す世界よ。

第9話 うおおおお！僕アルバイトオオオオ！

「リサ～、きたよー」

「アリストー！ごめんね急に」

私はコンビニでこここの制服を着てスタッフフルームにいる。目の前にいるのは今井リサちゃん。羽丘の3年生で私の友達。そして紗夜ちゃんとりんりんちゃんのバンドメンバーもある。

「いや～急に悪いね～」

「モカちゃんがああなつちゃ仕方ないよね」

そう、リサはこのコンビニでバイトをしているのであるが、相棒の青葉モカちゃんがインフルエンザになってしまい出勤停止に。

他のバイトの人もたまたまシフトの調整が合わず、このままではリサのワンオペになってしまうため、時間限定で私がバイトに入ることになった。

「一通りの業務はできると思うけどわからなかつたら教えてね」「即戦力助かる～～！」

そんなこんなで業務を人並みにこなしているわけである。

「いや～この手際の良さは人並みのレベル超えてるなあ～」「人の心を読むのはマナー違反だぞ～？」

そそこそ忙しくわりと楽しく仕事をしているが、やはりコンビニ。老若男女色んなお客様が来る。

しかしこのあたりは治安がいいのかマナーのいいお客様がいいように思える。

「リサちゃん、すまんけどまた教えてくれんかね？」
「はーい。これの操作難しいですよね〜」

リサに至つては常連と完全に顔見知りとなつており、今日もコピー機を使いに来たおばあちゃんの相手をしている。

「はい、おつり300円です。ありがとうございました！」
「きやあ〜アリスお姉さまからおつり貰つちゃつた!!」
「あはは〜そりやおつりですもの」

私がここでバイトしているとどこから話が広がつたのか、同じ学校の子たちがこうやって来てくれることも増えた。

「あの・・・これ・・・」

何故か連絡先の書かれたメモを渡されることもある。

こちらに關しては後日謝る形になつて いるけど。

そんなこんなでバイトを始めてあつという間に1週間が過ぎて、インフルエンザの隔離から解放されたモ力ちゃんももうすぐ復帰するらしい。

「お会計1000円です」
「1万円でお願いします」

ホットスナックの在庫を整理しているとリサがあるお客様の相手をしている。

「9000円のお返しですありがとうございました！」

リサがそのお客さんを見送ると、その人は即座に戻つてきた。

「あのおつり9000円ですよね？」

そういつてお客様が見せてきたのは千円札が4枚。4000円しかなかつた。

「え？ アレ??」

リサが困惑する。

「いや困りますよ」

「しかし確かに渡ししたかと・・・」

「それはいつも実際手元に4000円しかないわけですよ。店外には出でていませんし目の前にあるのが事実では？」

なにやらもめている。

ちょうどホットスナック商品の整理が終わつた私はレジに合流することにした。

「どうかしましたか？」

「さつきお会計して9000円のおつりを私つもりだつたんだけど4000円しかなつておつしやつてまして・・・」

「そうですよ。受け取つて店を出ることなくすぐ戻つてきたんです」「なるほど」

んくなーんか怪しいなあ

リサがそんな単純なミスをするはずないし。

しかしだからといつてこの状況で判断するのは難しいところ。

「もういいです。貰つた貰つてないを言い合つても仕方ないし、商品とおつりは返すので1万円を返金していただけますか？」
「そうですね・・・」

リサは判断しかねるといった様子。
仕方ない、ここは私が出ますか。

「うーん。札数の確認はしたんですね？」

「はい。でもお客様の前でしたわけじやなくて」

「なるほど」

これは・・・多分クロ。

いくらなんでも札の枚数を間違えることはあつても5000円の抜けを見逃すわけない。

「お客様、申し訳ございません。一度レジ上に設置されている防犯力メラの映像を確認してもよろしいでしょうか？」

「なんだよ、疑うのかよ」

「お客様を一方的に疑っているというわけではありません。当店のスタッフがお札の枚数を数えている映像もあると思うので、お客様のおっしゃるように当店のミスでしたらその映像もあるはずなので・・・それを確認するためにも少しお時間をいただけないでしょうか？」

この手のクレーム対応の基本。

それはどちらかを一方的に悪いと決めつけるのではなく、あくまで「どちらが悪いのかわからない」「確認するのはお客様のためでもある」というスタンスを崩さないことだ。

「人を疑うということはそれなりの覚悟があるんだろうなあ？あ？」

とはいつたもののこの客にはそんな配慮は無意味だつたようだ。

声のトーンは完全に脅しにかかっている。こつちは女子高生2人。凄んでゴリ押しすればなんとかなると思つてているのかもしれない。

「その結果当店のミスであつた場合は誠心誠意謝罪いたします」「謝罪だけで済むかね？」

なんて強がつてゐるが明らかに焦つてゐる雰囲気が伝わつてくる。

「一応、上席に連絡の上確認を行います。少々お時間をいただきますね。今井さん、店長に電話してきていただけるかしら？」

「は、はい」

「あーもうめんどくさい。時間ががないんだ。もういい。5000円は諦めるから俺は帰る！」

「お待ちください！」

私はカウンターの外に出て客に近づく。

「近寄るな！」

バシン！

反社的に男の手が動き、その手が私の頬に命中する。

「アリス!?」

リサが心配そうに声を上げる。

大丈夫だよりサ。命中“した”んじやなくて命中“させた”んだから

「うおおおおお！僕アルバイトオオオオ！」

わりと余裕があつたので少しネタに走つてみた。え？知らない？検索してみなされ。

「な、なんだよ！お前が勝手に近寄ってきたんだからな！ちくしょう、あんま調子に乗るとぶつ殺すぞ！本部と通っている高校にもクレー ム入れてやるぞ！」

「暴行と脅迫の現行犯です。逮捕します」

「何？いででででででで！！」

「リサ！警察に電話を。客が店員を殴って私人逮捕したって言えばいいから。その後店長にもお願ひ！」

「わかった！」

私はその男を締め上げ、制圧する。

「放せ！ガキがこんなことしていいと思つてているのか！？」

「法律の則つた行為ですよ」

逮捕と聞くと警察官が犯罪者を・・・というイメージが大きいが実は法律上、私人逮捕といつて警察官以外の市民でも逮捕を行うことは可能だ。

ただしそれは現行犯に限られているし、身柄誘致（引渡し）できる警察官の役職にも決まりがある。通報したけど無資格の警察官が来ても困るので通報時に私人逮捕をしたと伝えるのはわりと重要なのだ。

「おおかた、女子高生相手だからと油断していたんでしようけど、残念ですね」

「クソツッ！クソツッ！なんでだ!?ピクリとも動かない!!」

そして集まつてきた野次馬や常連たちも加わり男は完全制圧。そのまま警察に引き渡されていったのであった。

※

「アリス、頬つぺた大丈夫?」

「うん。ちよつと赤くなつただけだよ。リサこそお疲れさま。大変だつたよね」

「いやいや、アタシあたふたしてただけだし」

警察に男の身柄が引き渡されたあと、私たちはスタッフ控室にいた。

ひとまず業務は一旦停止で私たちは警察の事情聴取のための待機である。

警察は駆け付けた店長と一緒に防犯カメラ映像の確認をしている。

「ううう、事情聴取なんて初めてだから緊張するなあ」

「そうたいしたもんじやないよ。今回は被害者だしありのまま起こつたことを話せばいいのよ」

「なんか慣れてるなあアリス」

「そんなことないよ」

まあ実際こちらは未成年の女子高生。被害者。さらに防犯カメラにばつちり証拠が収められているだろうから多分危惧することはない。私人逮捕も問題ないようにふるまつたはずだ。

「お待たせしました。やはり今井さんは間違いなく9000円のおつりを渡していました」

カメラの確認を終えた店長が警察官とやつてきてそう告げる。

「よかつた、間違えてないつもりだつたけどやつぱり不安だつたあ

」

「よかつたね、リサ」

「ご協力感謝いたします。ちなみに志賀さんへの暴行、脅迫の映像もバツチリ撮れていたので、このまま男は警察で引き取ります」

これであの男は詐欺未遂、暴行、脅迫の3連コンボか。こりやあお先真つ暗だなあ。

警官の話を聞くところによると、どうやらおつりを受け取って振り返った瞬間5000円を懐に入れてすぐさま振り返って・・・という手口だつたらしい。同様の手口が近隣でも多発していたらしいので、おそらく詐欺の既遂もいっぱい加わるだろうなあ

「しかし志賀さん、いくら何でも危険です。今度からは下手に前に出ないようにしてすぐ警察や私に連絡してくださいね」

「あはは、すみせん」

店長に怒られてしまつた。

「それではこれから署で事情聴取を行いますので、店長さん、申し訳ありませんがお一人をお借りいたします」

あらら～店長ワンオペになつちやうわね。

店長も仕方ないかさすがに・・・つて顔をしている。

「じゃありサ、一緒に行こうか」「うん」

こうして警察署にパトカーで向かい、事情聴取が終わることには夜になつっていた。

リサはお母さんが迎えに来ていて、私は迎えてくれる人なんていないので一人で帰ることにした。

「アリスは一人暮らしなんだつけ?」

「そうよ~」

「せつかくだし今日ウチこない?お母さんもお礼がしたいつて」

「そうよ～アリスちゃん大活躍だつたみたいね！せつかくだし晩御飯どうかしら？」

リサとリサママがキラキラの笑顔で提案してくる。

「そうですね～…うん、ではお言葉に甘えようかな。よろしくお願ひします」

「せつかくだから友希那も呼ばつか」

※

「うつ・・・うつ・・・リ、リサ・・・辛いよお・・・」

「あ、アリス・・・アタシも・・・もう無理・・・」

「どういうことかしらこれは」

友希那がやつてきて第一声がこれである。

なぜかつて？私とリサが目から涙をボロボロ流しているからである。

「ゆ、友希那・・・」

「な、なにかしら・・・？どこか痛いのかしら・・・？」

「タマネギ切つてたからくつそ目が

染みるんよ」

「・・・心配を返してちようだい」

夕飯の支度を手伝うことになつた私とリサはタマネギの皮むきとカットを担当していたからね、こうなるのも仕方ないね。と、いうわけでそのあとは楽しいお食事会であつた。

しかしあれだなあ・・・なんか行く先々で友達がトラブルに巻き込まれるのつてやっぱ“こういう世界”で私の役割だからなのかなあ・・・

「やつと私の出番かと思つたらこれだけなんてあんまりじゃないかし
ら」

食事が終わり解散、というところで友希那がなんかメタ発言してい
るような気がしたけどきつと気のせいよね。

彼女にはまた舞台が用意されることだろう。
というわけでおはよう、私の愛す世界よ。

第10話 ガレット・デ・ロワとセクシーサンタ

「いえーい！メリークリスマース!!」

香澄ちゃんの元気な声が響き渡る。

そう、ここは市ヶ谷家の蔵。私はポピパのクリパにお邪魔させてもらっているのである。

え？なんでこの時期にクリパかつて？クリスマスイブから書き始めたくせに筆者が遅筆過ぎて気が付いたら1か月経ってたんだよ、言わせんな。

「いや～香澄ちゃんは元気だね～でもよかつたのかな。部外者の私がお邪魔しちゃつて」

「全然大丈夫です！むしろ来てもらえて嬉しいです!!」

「そうだね～アリスさんならいろんなところからお誘い来てただろうし」

沙綾ちゃんの言う通り、実は他からもお誘いはいただいていたのであるがポピパにお誘いいただいたのが一番早かつただけという極めて単純な理由である。そういうえばハロハピのクリパに誘ってくれてたかのちゃん、断つたらこの世の終わりのような顔してたなあ・・・あとでフォロー入れとかなきや。

「ま、いいってことよ。とりあえずお料理を運ぼうか」

お料理は私と沙綾ちゃんで担当した。市ヶ谷家のキッチンを借り出来上がったものをみんなで運ぶ。一通りクリスマスらしい料理は揃えることができただろう。

「よし、じゃあ料理もそろつたところで」

「」「」「メリーカリスマス！」

シャンメリーコルクをポンツつと空けて一斉に叫んだ。

「そういうえばなんでシャンパンじゃなくてシャンメリーナんだろう？」

「シャンパンでメリークリスマス”って言うのが語源みたいよ。元々はノンアルコールのソフトシャンパンつて名前で売り出してたけどフランスからシャンパンじゃないものにシャンパンの名前を使わないでつて言われて今の形になつたみたい」

「へ～アリスさん物知りだなあ」

何気なく答えた感心されてしまった。でもこのせいで”シャンパンもどき”を”シャンパン”と思いこんで、しかもそれしか飲んだけがなくて”シャンパンはまずいもの”っていう認識を持つ人もたくさんいたらしい。そう考えるとフランス政府の要求は至極真っ当なものかもしれないね。

※

「じゃーん！」

クリパが進み料理も結構減つてきた。

そんなタイミングで香澄ちやんが何かを取り出したのだ。

「これは？」

「えへへ～これはですね～・・・」

がさがさと袋を漁り取り出したもの。

それは”セクシーサンタコス”と書かれたサンタのコスプレ衣装であつた。

「なんか結構売れてて2着しか買えなかつたけど、誰かこれ着ようよ！メリークリスマスつて感じで!!」

ふむ。悪くない。

真冬に着るには似つかわしくない露出が多めなサンタ衣装だ。

あんなもんを着てプレゼントを配りに回つてたらただのドMだし
あの露出、確実に痴女だろう。

だが暖房の効いた室内で切るなら別。可愛い女の子のセクシーサンタの出来上がりである。

「ええ!? 香澄ちゃん!? それはちょっと露出が・・・」

「うーん。私も恥ずかしいかなー」

「そう? 私はいいけど」

「香澄・・・さすがに恥ずかしすぎるぞそれは・・・」

みんなはちょっと気が進まないようである。一人を除いては。

「えーせっかく買つてきたのにい」

「そこまでいうなら香澄が着るよな! アリスさんもなんか言つてやつ
てください」

「うん、着ようか」

「そ、うそ、うそ、ええ! ?」

まあクリスマスだし室内で他の誰が見てるわけでもないし少しく
らいハメを外してもいいだろう。

あ、そうだ

「そ、うそ、うそ、ええ! ?」

実はクリスマスケーキも私が担当であった。

自宅で作つて持つてきたわけであるがそれをそろそろ出そうと
思つた。

なぜならケーキにはある仕掛けがしてあるからだ。

「冷蔵庫から出すね」

そういつて冷蔵から出したケーキをみんなの前に持ってきた。

「うわー！すごいです！！」

「普通にお店で出せそうな奴だ・・・」

「美味しいぞ～～～！」

「あ、写真撮ろ」

「アリスさんすげえ・・・万能すぎる・・・」

ポピパのみんなが口を揃えて褒めてくれると悪い気がしない。

登場したケーキにみんなは夢中でセクシーサンタ衣装のことをするに忘れているようだ。

「じゃあ切り分けて・・・」

「おつと香澄ちゃん。待つた」

私は待つたをかける。もちろんケーキに施された仕組みを説明するためである。

「ガレット・デ・ロワって知ってる？」

「かれつとでろわ？」

「あ、聞いたことがあります。フランスのやつですよね？」

さすがパン屋の娘。沙綾ちゃんは心当たりがあるようだ。

ガレット・デ・ロワが何かと説明すると、フランスのお菓子である。本来は新年を祝うもので、王冠の乗ったホールパイの中に陶磁器で作られた小さな人形が仕込まれており、切り分けたパイからこれを引き当てた人はその日の王様となり、皆から祝福される・・・という縁起物である。

ということを説明した。

「これをやろうと思つてね。まあケーキだし新年でもないけど……実は仕込んできました！」

盛り上がりがればいいかなーと思つて、思い付きで仕込んだわけだけどまさか役に立つとは……

「あ～そういうことっすか……」

「あーちゃんは気づいたみたいね」

「あ！なるほど！」

「沙綾ちゃんも」

「いいアイデアかも」

「うう～あたりませんように……」

「え？え？どういうこと？」

香澄ちゃん以外は気づいているようである。

「つまりアレですよね。王様じゃなくて今日のサンタを決めようつていう」

「さっすがあーちゃん！その通り。人形を引き当てた人が今日のサンタつてことで」

「それなら公平ですけど……しかし本来引いたら嬉しいはずの人形がセクシーサンタとは……」

「なるほど!!でも衣装は二着ありますけどもう一人はどうしますか？」

「香澄……もう一着は使わないとっていう選択肢はないのかよ……」

あーちゃんが呆れ気味にいう。

「う～んそ～だな～……じゃあ当たった人が指名でいいんじゃないかな？恨みっこなしで」

そう提案したところ、特に反対意見も出なかつたため早速ケーキを切り分けたのであつた。ちなみに人形は陶磁器でなくクラッカーで作つてあるので、こちらも美味しくいただけるだろう。

※

「よし、皆さまケーキはいきわたりましたかな？」

「おつけーです！」

「よし、じゃあいただきます!!」

「「「「「いただきます!」」」」

みんな緊張した面もちでケーキを恐る恐る食べ始める。

「・・・ないですね」

「こつちもない」

「よかつたあくないわ〜」

「ハズレみたい」

沙綾ちゃん、おたえちゃん、りみちゃん、香澄ちゃんはハズレのようだ。

「ということは・・・・・

「私とあーちゃんの一騎打ちだね」

いやー！・・・・・あつ

「入つてたわ」

「・・・あれ、私も」

なんと二人とも入つていた。

「あ～これ・・・うーん。焼いたときに割れちゃつたのかなあ」「この場合はつてどうするんですかね？」

そこには真っ二つに割れたクラツカーリ製の人形。

どうやら作る過程のどつかで割れてしまつてそれが切り分けたと
きたまたま2ピースのケーキに混入してしまつたようだ。

「二人ともサンタでいいんじゃない？」

というわけで本日のサンタは私とあーちゃんに決まつたわけで
あつた。

1

「シヤ」

「これは予想以上に……ハシヤハシヤ」

—あらあら

阿鼻叫喚

まさにそれだ。可愛いを連呼してくれる香澄ちゃん。興奮して写真を撮りまくるりみちゃん、無言で写真を撮りまくるおたえちゃん、神妙な顔で写真を撮る沙綾ちゃん。うん、カオス！

「あ、はい。・・・・つてアリスさんまでええええええ！」

無論、あーちゃんは顔をゆでだこのように真っ赤にしている。
まゝ確かに気持ちはわかるよ。このサンタコス、想像以上のセク
シーサンタであるもん。もう本家のサンタクロースに謝れって言う
レベルでセクシーサンタ。

サイズがかなりきわどく、私やあーちゃんのサイズではスペツツや
ブラを装着できなかつた。故に下は生パンだし上は生乳。胸は生乳
でもかなりキツイ。支えているのは心もとないボタンだけである。
正直室内じやかつたら逮捕されるし写真もギリギリ児童ポルノ法
に引っかかるレベルである。

「まあまああーちゃん、ここまで来たら開き直つて楽しんじゃおうよ。
ほらくつつこ？はーい！アリス＆アリサええす」

「シテ・・・コロシテ・・・」

あーちゃんを抱き寄せてギュツとする。あーちゃんはもうどうで
もいいやと目が死んでいるがまあ仕方ない。

「きやー！ パシヤパシヤ」

「りみちやーん、鼻血」

「はっ!?」

興奮しすぎである。

「有咲くくくー！こつちで写真撮ろうよ！」

「シテ・・・コロシテ・・・」

「ほらほらーおいでよー」

ドン ブチッ

「え・・・？」

香澄ちやんがあーちゃんの背中を叩く。
その刹那、胸のボタンがはじけ飛ぶ。

ばいいいいいいん！

「ええええええ？」

それぞれが感想を述べる。そしてみんなの視界に入つたのは・・・ボタンがはじけ飛ぶことで支えがなくなつた、あーちゃんの双丘であつた。

あーちゃん、落ち着いて・・・あつ！」

我を忘れて叫んで体を揺らすあーちゃんの体当たりを受けてしま
う。

ブチツ
ばいいいいいん！

「あらやだ」

無論、私のボタンもはじけ飛んだわけである。

「どうも～アリス＆アリサで～す」

「そんな」と言つてる場合じやなああああああい！」

「これは失礼」

どうやらそういう場合じゃないらしい。

「りみりんが死んだ!?」

「これはこれは……あれ、写真はさすがにますいが」

れ
・
・
・
・

「シテ・・・・コロシテ・・・・」

上半身裸の変態二人、鼻血を出して倒れるりみちゃん、介抱する香澄ちゃん、意外と冷静なおたえちゃん、どうしていいかわからない沙綾ちゃん。放心状態のあーちゃん。

このクリハはまさに“カオス”的の一言

「方雜!? それに私を変態にしないでください!!!!」

そんなこんなでいつも言つてみよう。
おはよう、私の愛す世界よ。